2024 年度
北陸 ESD 推進コンソーシアム
成果報告書

2025 年 2 月

北陸 ESD 推進コンソーシアム

目次

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

【成果報告１】主要会議等報告（文部科学省ユネスコ活動費補助金事業報告１）
・　北陸 ESD 推進コンソーシアム成果報告会の開催概要　・・・・・・・・・・・・　4
・　北陸ユネスコスクール教育実践交流会の開催概要　・・・・・・・・・・・・・・　9
・　北陸 SDGs 未来都市人材育成・教育フォーラム 2025
　―R6 能登半島地震の発災復旧復興からの学びを人材育成へ―の開催概要　・・・　10
・　北陸 ESD 推進連絡協議会の開催概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12
・　ESD・SDGs オンライン講座―R6 能登半島地震の復旧・復興・支援に学ぶ―
　―地域のレジリエンス強化と教育のレジリエンス―の開催概要・・・・・・・・・　12
・　ESD・SDGs 教育実践者交流会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　16
・　北陸 3 県における県別の報告会、交流会の状況・・・・・・・・・・・・・・・・　17
・　2024 年度におけるユネスコスクール等の実践報告（教材の対象教育実践）・・・・18
・

【成果報告２】実践・事業報告(文部科学省ユネスコ活動費補助金事業報告 2)
「北陸における SDGs 達成に向けた e ラーニング教材開発及びコミュニティづくりによる教員等の専門能力開発」
・　予備調査（訪問・ヒアリング等）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
・　SDGs・ESD 推進検討委員会（通称：コア会議）の設置と検討状況　・・・・・・　21
・　SDGs 達成に向けた e ラーニング教材（実践編）の開発　・・・・・・・・・・・　22
・　ESD コミュニティ創生事業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
・　ESD・SDGs オンライン講座　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　25
・　SDGs の達成という観点に立った北陸の教員養成・・・・・・・・・・・・・・・・　26
・　周知普及とフィードバック及び全国連携・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　30
・　本事業の外部評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　31
・　本事業の総括と展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　36
・

資料
・　「SDGs 達成に向けた ESD」を学ぶオンライン講座資料・・・・・・・・・・・・・　44
・　画像資料及びアンケート用紙、アンケート（概要）・・・・・・・・・・・・・・・　46
・　「大学生グループによる能登半島地震から学ぶ」e ラーニング教材制作資料　・・・53

はじめに

いま、私たちは真にこれからのことについて、正答のない時代を生きている。

昨年 2024 年は 1 月 1 日の能登半島地震にはじまり、復旧作業の進捗が見え始めた 9 月には豪雨災害に見舞われた。日本ではこれまで、1995 年の阪神淡路大震災や 2011 年の東日本大震災をはじめとして、これまで数多の大規模自然災害があり、私たちはその度に発災後の救助や初期対応、その後の人々のケアと生活・地域の再建、防災等に繋がる様々な取り組みについて経験を重ね、ノウハウを積み上げてきた、はずであった。それでもなお、能登ではこれまで想定されなかったこと、これまでのようには行かないことが次々と生起してその対応に追われ、今日に至っている。これまでに得た経験だけでは対応できない事柄に対して、様々な人々が持てる力と知恵を発揮し、実情に応じて試行錯誤しつつも、よりよくなるよう取り組みが各方面で続いている。

私たちは改めて、自然や人々の暮らしについて見つめ直し、学び直し、問題課題を見つけて整理し直し、これまでの経験を活かしつつも柔軟に解決方法を探し、様々な人々がこれまでの垣根を越えて力と知恵を合わせて行動する…これまでになかった答え、新たな価値を生み出しよりよくする、そんな一筋縄ではいかない力が必要であることを痛感させられている。

本報告書では、北陸 ESD 推進コンソーシアムの 2024 年度活動を記録し、まとめている。

昨年度まで 5 カ年にわたり「文部科学省ユネスコ活動費補助金事業」等による支援を得て取り組んで来た、北陸地区の①ESD・SDGs に関わる実践を基にしたオンライン教材開発、②仲間とともに学び、新たな取り組みにつなげるコミュニティ創成支援事業、等を基盤に、特に今年は能登半島地震発災を受け、地域と教育のレジリエンス強化にむけて、経験された方々から実情を伺い、先達から学び、これからについて世代を超えて学び合う取り組みを行ってきた。この取り組みの経緯をありのままに提示共有させていただくことで、課題を洗い出し、今後よりよく進めるための知恵をいただき、ともに取り組みを前に進められることを願っている。

最後になりましたが、私共の取り組みに対して参画、協力くださった各自治体、関係機関、地域の方々、そして先生方子どもたちに改めて御礼を申し上げます。

北陸 ESD 推進コンソーシアム　事務局長　加藤 隆弘
（金沢大学大学院教職実践研究科　准教授）

【成果報告１】主要会議等の報告（文部科学省ユネスコ活動費補助金事業報告１）

○2024 年度 北陸 ESD コンソーシアム成果報告会
「R6 能登半島地震に学ぶ―地域のレジリエンスと ESDー」

主催：　北陸 ESD 推進コンソーシアム
共催：　石川県ユネスコ協会
後援：　ESD 活動支援センター、中部 ESD 活動支援センター、金沢市教育委員会
　　富山市教育委員会、南砺市教育委員会、勝山市教育委員会、JICA 北陸
　　富山ユネスコ協会、ふくいユネスコ協会
目的：　北陸における SDGs 達成に向う ESD を進める授業実践や教育活動の状況ならびに、文部科学省ユネスコ活動費補助金事業等について報告する。
日時：　2025 年 2 月 1 日（土）14：00～17：00
場所：　金沢市近江町交流プラザ、オンライン（Zoom）
参加者：５２名（会場参加：２８名、オンライン参加２４名）
内容：
　開会挨拶　主催者　金沢大学大学院教職実践研究科　准教授　加藤　隆弘
　　（北陸 ESD 推進コンソーシアム　事務局長）
　ビデオ挨拶　　文部科学省国際統括官付国際統括官補佐　生田目　裕美

（挨拶概要）

（開会挨拶 主催者：金沢大学大学院教職実践研究科　准教授　加藤　隆弘）

今日は北陸 ESD 推進コンソーシアムの成果報告会に、たくさんの方々にご参加いただきましてありがとうございます。会場にも、それからオンラインでも全国からご参加いただいており、本当にありがとうございます。

金沢大学ではこの 6 年間文部科学省ユネスコ活動費補助金事業を担当させていただき、様々な教材を制作し、ESD、SDGs、ユネスコスクールとしての活動に取り組んでおられる学校や団体の皆様の支援や教材開発等に取り組ませていただいてきました。本日は今年度の取り組みの成果報告をさせていただきたいと思います。

今日も多くの実践報告等をいただくことになっております。能登の学校や能登での学生の皆さんの取り組みであるとか、そういったものを中心に皆さんにお声掛けし、お話いただく形になっております。

言うまでもなく、昨年度 1 月 1 日の能登の震災であるとか、その後 9 月の豪雨災害、そのようなものもあって非常に苦しい状況で、能登の方々は取り組んでおられます。私も多くの能登の学校に伺っていますが、本当に先生方も子供たちも、今能登にいる子たちは元気に明るい顔で取り組んでくれています。でも、その裏側では、大変なご苦労もあったり、それこそ先生方も被災者であられる中で、非常に素早い学校教育の復旧に取り組んでいただいてきた、その裏では、様々にご苦労されている様子も、先生方から伺

っています。いろいろ僕らも聞きづらくて、それでも聞いていくと、いや、私も被災しました、家無くなりました、ってニコっとしながらお話されますけれども、そんな生やさしい状況ではないだろう、というところです。今はとにかくその能登が日本の20年先を行くような状況で課題に直面しながら、それでも、皆さん前向きに取り組んでおられます。

そこから私達は様々なことを、その良いところや課題をしっかりと学んで行く必要があります。日本は災害大国ですので、これからも様々なこと起こるでしょう。それに対しても、できるだけ早めに復旧復興をして前向きに取り組んでいけるように、そしてこれからを生きる子供たちが本当に元気で、世界で活躍してくれるような状況を作れるように、そういったことを皆さんと一緒に考えていける場にしていければと思っています。

今日ご発表をお願いした皆様には、本当にご負担をおかけしましたけれども、忌憚なくお話をいただき、またその後、意見交流できればと思います。オンラインで参加されている皆様には、ぜひチャット等で随時感想であるとかご質問であるとか打ち込んでいただければと思います。最後のところ、あるいはその要所要所でそれらを取り上げながらかわって質問をさせていただいたり、意見交流等、ぜひさせていただければと思います。

たくさんの発表内容を今日は盛り込んでおりますので、時間ギリギリいっぱいになるかもしれませんが、何卒最後までご参加の方よろしくお願いいたします。

（ビデオ挨拶 文部科学省国際統括官付国際統括官補佐　生田目　裕美）

皆さんこんにちは。文部科学省国際統括官補佐の生田目と申します。北陸ESD推進コンソーシアム成果報告会の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

昨年は年始の能登半島地震をはじめとして、台風や豪雨など多くの予期せぬ自然災害が発生した1年でした。被災された方々に改めて心よりお見舞いを申し上げます。

本日の報告会でも、被災地からの教育実践報告ということで、お話しいただけると伺っております。子どもたちの学びを止めず、復興に向け、日々尽力されている先生方や、全ての関係者の皆様に心から敬意を表します。

現在、世界は気候変動に伴う自然災害の激甚化、戦争や紛争に伴う人道危機など多くの深刻な課題に直面しています。このような中で、持続可能な開発目標（SDGs）は、誰1人取り残さない社会の実現を目指し、経済・社会・環境を巡る広範な課題に統合的に対処するため、2030年に向け、世界全体がともに取り組むべき普遍的な目標として国連で採択されました。

皆様ご承知のとおり、SDGsには17の目標が設定されていますが、2019年の国連総会で、ESDは全てのSDGs達成の鍵であると位置づけられ、推進されてきました。地球規模の課題を、私達1人1人が自らの問題として捉え、その解決に向けて行動する人材

を育成する、持続可能な開発のための教育（ESD）は、わが国においては、学習指導要領の前文において、「持続可能な社会の創り手」の育成として掲げられています。さらに、一昨年 6 月に閣議決定された第 4 期教育振興基本計画においても、総括的な基本方針として、「持続可能な社会の創り手」の育成を掲げるとともに、今後の教育政策に関する基本的な方針に、ESD の推進を明記しているところです。

本日の報告会では、学校の先生方だけではなく、様々なステークホルダーからの実践発表がなされると伺っています。ESD 推進の実践や連携の成果を共有し、活発な意見交換が行われることを期待しております。最後に本日の成果報告会の開催にご尽力いただきました北陸 ESD 推進コンソーシアムをはじめ、全ての関係者の皆様に感謝申し上げます。また、ご参加の皆様が、本日の発表から多くの成果を得られますとともに、北陸地域で ESD を実践されている方々の連携、協働がさらに深まり、拡大することを祈念して、私のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

1．成果報告（文部科学省ユネスコ活動費補助金事業）

（1）R6 能登半島地震被災地からの教育実践報告

・　地域での学びから持続可能な社会を考える学習機会の創出

珠洲市自然共生室　自然共生研究員　宇都宮　大輔

（兼　能登 SDGs ラボ　コーディネーター）

・　海に親しみふるさとにほこりと愛着を持つ児童の育成

能登町立小木小学校　校長　倉見　倫代

・　被災地で学びをつなぐ・学校教育コーディネーターの果たす役割

能登里海教育研究所　主幹研究員　浦田　慎

・　能登半島地震に学ぶ e ラーニング教材制作学生プロジェクト

（株）ガクトラボ　金沢大学・金沢学院大学合同学生グループ

金沢大学　　4 年　小倉　凌

2 年　山梨　英里奈

金沢学院大学　4 年　荒島　蓮、田村　仁

3 年　杉村　明日香

（2）（1）の報告に関する協議

（3）今年度の事業の中で生み出された教育実践や教育活動

・　犀桜小学校における生物文化多様性の教育実践

金沢市立犀桜小学校　教諭　木村　元威（6 年生担任）

金沢市立犀桜小学校　教諭　西田　華菜美（6 年生担任）

国連大学サスティナビリティ高等研究所 OUIK

研究員　フアン・パストール・イヴァ―ルス

（病気療養中で欠席：コメント代読）

・　富山市における被災地と交流を通した防災・減災教育

富山市立神通碧小学校　教頭　　林　亜希子

富山ユネスコ協会　　副会長　水上　庄子

・　未来につなげ「ギフチョウ守り隊」

～貴重なギフチョウが生息している城端地域～

南砺市立城端小学校　教諭　梅原　沙織

・　地域と共に持続可能な社会の実現を目指す実践

勝山市立荒土小学校　校長　多田　誠一郎

（４）教育実践報告に関する協議

（５）能登半島地震の被災地に対する金沢大学の教育支援の報告

（６）事業実施概要報告（文書報告）

①　e ラーニング教材（実践編）制作について

②　R6 能登半島地震に学ぶオンライン講座について

③ コミュニティ形成事業について

２．全体討論

３．講評

富山大学学長特命補佐　成瀬　喜則

金沢大学大学院教職実践研究科　准教授　加藤　隆弘

（講評概要）

（金沢大学大学院教職実践研究科　准教授　加藤　隆弘）

前半中心になりますが、3 点に絞ってお話をしたいと思います。

まず、子供たちが地域を通して学ぶというのは、やはり本物に触れていくということで学んだことを実際に本物に関わったり、本物の人から話を聞いたり、そして実際に自分たちもやってみるというようなことを通す中で、子供たちが「自分事」として取り組むということが本当にできている姿を、しっかりと見せていただいたかなと思います。

2 点目になりますけれどもそこに関わってくるのは、今日、宇都宮さんや浦田さんや水上さんや皆さんにお話をいただきましたが、地域の専門家や機関の方、あるいは教育関係者の方と、学校と子供たちが繋がることでできることが大きく増えてくるんだなということを改めて実感させていただきました。それが ESD を進めていく上ではとても大切な事になってくるのかなと思いました。

また、水上先生のところで具体的にお話をいただきましたけれども、学校の中だけでは、例えば地域の方々や企業から資金や人手を借りてきたり、もらってきたりっていうのはなかなか難しいんですよね。中には先生方の中でもパワフルな方はそういうことを一生懸命されるんですけれども、もう本当に先生方はオーバーワークです。そういったときに、外のコーディネーターがその仲立ちをしていく。浦田さんのところでもお話しいただきましたよね。こういうことを有効に活用することで、子供たちが 1 点目に述べ

た「本気で学ぶ」「本物を通して学ぶ」「本物に関わって学ぶ」ということが、実現できる。このことが、高校生、大学生、それ以降の探究の学習であるとか、実際の実践に繋がってくるのかなと考えました。

最後、3 点目ですけれども、これも水上先生のところで出していただきましたが、能登もそうだと思いますし、その他のところでもよく見られる姿ですが、子供たちが一生懸命地域に出て、学んで、質問していくことで、質問される、あるいは一緒に関わる大人の方が本気になって、学んだり行動しているという姿がいろんなところで見られます。これは地域が元気になる一つの、とても大きなチャンスになってくるのかなと感じます。大学生の皆さんも、実際にそこに関わることで具体的に自分たちだけでは学べなかった機会が得られたのかな、それを糧にしてまたこれから教職頑張っていってくれるんだろうな、と期待しています。

ぜひこれからも地域を通して学ぶ ESD の取り組みを、この北陸の地、それから全国でしっかりと展開していければと思います。

（富山大学学長特命補佐　成瀬　喜則）

後半の 4 件の発表を聞かせていただきまして、大変素晴らしい取り組み、実践だったと思います。特に、なるほどと思ったのは、先生方は子供たちを指導するのではなくて、先ほどお話がありましたが、「子供たちの学習のきっかけを作っている」というところが 4 つの学校とも共通していたか思っています。

犀桜小学校の実践は、学習のきっかけを作ると同時に、子供たちに新たな観点を与えて、人口減少と生物多様性との関係を考えてもらっています。神通碧小学校の実践では、子供たちの活動がきっかけで、地域の人も一緒に防災について目を向けるきっかけを作るような学習になっています。また、城端小学校は、学びが深まるにつれて、活動の様子をもっと広めたいという子供たちの気持ちを育成しています。さらに、荒土小学校は、地域の人と企業の出会いから可能になるような学習活動を作り出しておられます。4 つの実践はとっても素晴らしくて私としては参考になりました。

持続可能な社会の育成ということを考えたときに、先生と地域とが一体となって子供たちとの学習のきっかけを作るという素晴らしい取り組みであると思いました。どうもありがとうございました。

４．外部評価

外部評価委員からの成果報告に関するコメント（p 31 参照）

⑦ 外部評価委員からの成果報告に関するコメント

持続可能な開発のための教育推進会議（ESD-J）理事　鈴木　克徳

奈良教育大学 ESD・SDGs センター センター長・教授　中澤　静男

信州大学教育学部附属志賀自然教育研究施設　准教授　水谷　瑞希

閉会挨拶　北陸 ESD 推進コンソーシアムコーディネーター　今井 和愛

○2024 年度北陸ユネスコスクール教育実践交流会
「R6 能登半島地震に学ぶ―地域のレジリエンスと ESDー
防災・減災（教育）と気候変動（教育） について考える」

主催：　北陸 ESD 推進コンソーシアム
共催：　石川県ユネスコ協会
後援：　ESD 活動支援センター、中部 ESD 活動支援センター、
　　金沢市教育委員会、富山市教育委員会、勝山市教育委員会
　　JICA 北陸、富山ユネスコ協会、ふくいユネスコ協会
目的：　SDGs 達成に向う ESD を進める授業実践や教育活動の交流及び SDGs・ESD オンライン講座第 5 回を兼ねる
日時：　2024 年 12 月 7 日（土）14：00～16：30
場所：　金沢市近江町交流プラザ、オンライン（Zoom）
参加者：北陸等のユネスコスクール及び SDGs・ESD を進める学校、団体、また SDG s ・ESD に興味・関心のある方及びオンライン講座第 5 回に参加登録された方
参加人数：３８名（会場参加：１０名、オンライン参加２８名）
内容：　13：30～ 開場
　　13：50～ Zoom で参加開始
　　14：00～ 開会
　　開会挨拶　北陸 ESD 推進コンソーシアム　事務局長　加藤　隆弘
　　14：10～15：50 実践事例発表及び活動報告
1. 能登半島地震被災地からの実践発表(14：10～14：40)
（１）「小木小学校　海洋教育の実践」
　　能登町立小木小学校　教諭　田中　結香
（２）「被災地で学びをつなぐ能登里海教育研究所の果たす役割」
　　能登里海教育研究所　研究員　能丸　恵理子
２．北陸のユネスコスクール等の実践発表
（１）学校教育
　「オーストラリア留学で学んだオーストラリアでの SDGs 教育の実態」
　　井野口　陽一
（２）社会教育等
　「ユネスコ教室による ESD 推進」
　　富山ユネスコ協会　会長　高木　要志男
３．質疑応答
４．記念講演 ：「防災・減災（教育）と気候変動（教育）」
　　奈良教育大学 ESD センター　准教授　及川　幸彦
５．全体交流（意見交換・質疑応答）

６．講評　　富山大学学長特命補佐　成瀬　喜則
７．まとめ　　奈良教育大学 ESD センター　准教授　及川　幸彦
８．おしらせ　　北陸 ESD 推進コンソーシアム事務局
９．閉会挨拶　　石川県ユネスコ協会　理事　今井　和愛

○北陸 SDGs 未来都市人材育成・教育フォーラム 2025
―R6 能登半島地震の発災復旧復興からの学びを人材育成へ―

主催：　北陸 ESD 推進コンソーシアム
後援：　ESD 活動支援センター、中部 ESD 活動支援センター、ACCU 教育協力部
JICA 北陸、エコプランふくい、環境市民プラットフォームとやま
石川県ユネスコ協会、富山ユネスコ協会、ふくいユネスコ協会
目的：　令和 6 年能登半島地震で被災した地域の復旧・復興及びその支援は石川県のみならず、北陸 3 県の緊急かつ重要な課題となっている。教育分野においても、被災者でもある教員や教育関係職員が、復旧・復興を担い教育活動の継続と創造的復興に向けた努力が始まっている。防災・減災教育の一層の充実とシフトチェンジ、発災前から始まっていた地域のレジリエンスを高め持続可能な地域を創り担う人材育成としての先進的な教育活動の継続と発展が進められている。特に、大きな被害がある中で、「能登の里山・里海」教育などの継続と発展が、地域との協力協同や関係機関との連携を維持しながら力強く行われている。まさに教育のレジリエンスの強化に挑んでいる。

かかる R6 能登半島地震からの復旧・復興のプロセスから学び、それぞれの地域の持続可能性を向上させることに資することは重要な課題である。そこで、今後の防災・減災教育や地域・教育のレジリエンス強化など人材育成に向けた取り組み等について交流する機会を設け、今後も人材育成、教育分野における地域のレジリエンス強化に関する情報の共有、交流を行うコミュニティづくりに資することを目的とする。

日時：　2025 年 1 月 25 日（土）14：00～16：30
場所：　オンライン（Zoom）
参加対象：北陸の SDGs 未来都市における人材育成担当者及び教育委員会担当者
並びに関心のある市町の担当者、フォーラムに関心のある方
参加者：１８人（オブザーバー含む）
内容：（プログラム）
（1）開会挨拶
（2）開催趣旨等の説明　　北陸 ESD 推進コンソーシアム事務局長　加藤　隆弘
（3）車座トークのゲストの自己紹介
（4）ゲストによる車座トーク第 1 セッション

・環境教育の専門家　　金沢星稜大学　副学長　新　広昭
・里山・里海教育の専門家　　能登里海教育研究所　主幹研究員　浦田　慎
・ESD・SDGs 学習の専門家　金沢大学大学院教職実践研究科　准教授　加藤　隆弘
・教育の専門家　　富山大学特命学長補佐　成瀬　喜則
・ユネスコ活動の専門家　　富山ユネスコ協会　会長　高木　要志男
・教育の専門家　　金沢星稜大学　教授　清水　和久
ゲストによる話題提供と参加者も含めた議論

（5）ゲストによる車座トーク第２セッション
・被災、復旧、復興から学んだこと
・これからの人材育成・教育に生かすこと
などの各点から、参加者も含めた議論を通して、今後の人材育成や教育において重要な課題を明らかにする。

（6）ゲストによる感想とまとめ
（7）閉会挨拶（北陸 ESD 推進コンソーシアム事務局）
（9）事務局からのお知らせ

【参加者からの感想（抜粋）】
・スピーカーの皆様はきちんとポイントを示しながら具体的な取り組みについて話されていたので、良い勉強の機会になったと思います。
・初めての試みとして、開催することができたことは評価すべきと思います。内容的には、多くの課題があるので、今後徐々に改善していくと良いと思います。特に、SDGs 担当部局と、教育委員会を含む教育・人材育成部局との対話の場づくりが進むことを期待します。
・大学の取組や考え方を知ることができる貴重な機会だった。
・人材育成という観点ではあまりよくわからなかった
・私自身が初参加でどういう趣旨のものかが分かりにくかったためオブザーバーとして参加しましたが、主に学校教育現場のお話でしたので、場違いな感じがしました。オブザーバーでない参加を選んでいた場合、教授らの合間で見当違いの発言になってしまったかもしれないと思っています。学校教育課や教育委員会の皆さんが参加されていれば、参考になるお話だったかと思います。
・タイトルが「北陸 SDGs 未来都市人材育成・教育フォーラム 2025」でしたので、未来都市の SDGs 推進担当者として「有事のために今できること」や「人材育成の大切さ」「先進事例」などのお話になるのかなと思っていましたが、自治体の SDGs 担当者としては、自身の不勉強もあると思いますが、学校教育の場の事例のお話は少し遠く感じてしまいました。
・「へー、STYLY というツールで 3D の街並みが作れるんだ」などというという学びは一部ありました。
・せっかく教授がたくさんいらっしゃったので、各自治体の人材育成・教育の事例をひと

つでも紹介してもらい、それについて、人材育成・教育の専門家の皆さんから、より良いやり方やさらなる発展の仕方など、評価やアドバイスをしていただく形式にすると有意義だったかと思いました。

○北陸 ESD 推進連絡協議会

北陸の SDGs・ESD に関する活動を共有し、地域ユネスコ活動との連携を深めながら協働活動を促進し、関係者の連携を強化するために、北陸 ESD 推進連絡協議会を地域 ESD 活動推進拠点として一昨年度より石川県ユネスコ協会が主管して運営することにした。 本年度も昨年度に引き続き 6 月～9 に北陸 3 県の SDGs・ESD 推進する大学・行政・NPO・民間ユネスコ協会等の団体・個人の 27 名を北陸 ESD 推進連絡協議会の委員に委嘱した。

●令和 6 年度 第 1 回北陸 ESD 推進連絡協議会
日時：令和 7 年 1 月 29 日（水）13：00～15：00（オンライン開催）
参加者： 8 名
１．簡単な自己紹介　（ 名前・所属・一言　1 人 1 分程度）
２．令和 5 年度 石川県ユネスコ協会の ESD 推進の取り組みについて
(1) 地域ユネスコ協会としての ESD・SDGs 推進事業
(2) 北陸 ESD 推進連絡協議会の開催・運営
３．令和 5 年度北陸 ESD 推進コンソーシアムの事業について
(1) ユネスコ活動費補助金事業の実施概要
(2) 能登半島地震関連事業について
４．ESD に関わる現状についての意見・情報交換
・金沢市の SDGs 学習に関する顛末について
５．その他（意見・情報交換）

・令和 6 年度 第 2 回北陸 ESD 推進連絡協議会（3 月上旬予定し、2025 年度の取り組みについて意見交換の予定）

○2024 年度 SDGs・ESD オンライン講座
R6 能登半島地震の復旧・復興・支援に学ぶ
―地域のレジリエンス強化と教育のレジリエンス―

【開催趣旨】
2024 年 9 月、北陸 ESD 推進コンソーシアムは、設立 10 年の節目を迎える。また、3 年計画を 2 期継続し、「ESD for 2023」を進める e ラーニング教材開発やオンライン講座開講や交流会・報告会などの開催などを進めてきた。今年度はその 6 年目最終年度の予定で

あったが、1 月に発災した令和６年能登半島地震の被災地支援とともに、能登半島地震に学ぶ事業を加えて行うこととした。下記の開催内容のとおりオンライン講座を開催し、防災・減災教育や地域や教育のレジリエンス強化に向けて、令和６年能登半島地震から学び、これからに何をつなぐことができるのか、能登半島地震の被災地からの報告を受け、研究者や専門家と共に阪神淡路大震災、東日本大震災、南海トラフ大地震を繋ぎながら、防災・減災教育や気候変動教育、ESD について参加者と討論したいと考え、開催した。

【開催例：第６回講座内容】
１．日時　2025 年 1 月 24 日（金）17:00～18:30
２．開催方法　オンライン
３．主催　北陸 ESD 推進コンソーシアム
４．受講対象　ESD・SDGs に関心を寄せる教員、教育関係者、一般の方々
５．内容
①開会挨拶及び講師紹介
②現場報告　途上国支援等の現場から
独立行政法人国際協力機構北陸センター（JICA 北陸）　高野　勝郎
③講義
奈良教育大学 ESD・SDGs センター　センター長・教授　中澤　静男
講義題
「ESD(教育のレジリエンス)につなぐー地域と教育のレジリエンス及びその強化」
④質疑応答、意見交換
まとめ
⑤閉会挨拶及び事務局からのお知らせ（アンケートへの協力など）

【全６回の概要】

第１回　日時：2024 年 9 月 21 日（土）17：00～18：30
講師：国連大学サスティナビリティ研究所 OUIK　研究員　小山　明子
主題：「R6 能登半島地震に学ぶ―能登の魅力と創造的復興―」
報告：（奥能登：珠洲市）珠洲市教育委員会　太佐　真一郎　参事
（災害対応で不参加）
参加者：16 名

第２回　日時：2024 年 10 月 5 日（土）17：00～18：30
講師：奈良教育大学 ESD・SDGs センター
副センター長・准教授　及川　幸彦
主題：「東日本大震災に学ぶ―地域と教育のレジリエンス―」

報告：（奥能登：能登町）
能登町立小木小学校　校長　　倉見　倫代
前校長　加藤　政昭
参加者：20 名

第 3 回　日時：2024 年 10 月 19 日（土）17：00～18：30
講師：かがく教育研究所　　髙本　格
主題：「阪神淡路大震災に学ぶ―なぜ神戸で大地震が起こったのか？
―その教訓と今後の防災・減災教育の課題―」
報告：（奥能登：輪島市）
輪島市立門前西小学校　前校長
金沢市立押野小学校　　校長　　森田　清治
参加者：11 名

第 4 回　日時：2024 年 11 月 9 日（土）17：00～18：30
講師：三重大学地域圏防災・減災研究センター　教授　川口　淳
主題：「南海トラフ大地震につなぐ―地域と教育のレジリエンス及びその強化―」
報告：鳥羽市教育委員会　指導主事　川村　和徳
指導主事　濱口　真智子
参加者：15 名

第 5 回　日時：2024 年 12 月 7 日（土）14：00～16：30
（2024 年度北陸ユネスコスクール教育実践交流会と同時開催）
講師：奈良教育大学 ESD・SDGs センター
副センター長・准教授　及川　幸彦
主題：「ESD（気候変動教育等）につなぐ
―防災減災（教育）と気候変動（教育）―」
報告：能登町立小木小学校　教諭　田中　結香
能登里海教育研究所　研究員　能丸　恵理子
佐賀大学教育学部　井野口　陽一
富山ユネスコ協会　会長　髙木　要志男
参加者：38 名（会場参加：10 名、オンライン参加：28 名）

第 6 回　日時：2025 年 1 月 24 日（金）17：00～18：30
講師：奈良教育大学 ESD・SDGs センター　センター長　中澤　静男
主題：「ESD（教育のレジリエンス）につなぐ

―地域と教育のレジリエンス及びその強化―」

報告：独立行政法人国際協力機構北陸センター（JICA 北陸）　高野　勝郎

参加者：18 名

【事後アンケート結果の概要】

今年度もオンライン講座参加者を対象にアンケート調査を行い、2 月段階で２０件の回答が寄せられた。回答者の 65%は学校教育関係者で、残りの 35%は学校の連携団体等であった。また、ESD・SDGs に関心があるかとの問いには、65%が強くあると答え、35%があると答え、回答者 100%が関心を持っていた。ESD や SDG s の授業を実践しているかという問いには、85%が行っていると答えた。受講したオンライン講座の内容について、受講生の 100%が「とても良かった」「良かった」と回答し、今年度も満足度の高い講座となった。

【講座の内容に関する回答概要】

内容面では、今年度のオンライン講座では「R6 能登半島地震の復旧復興支援に学ぶ―地域のレジリエンス強化と教育のレジリエンス」を基軸にして構成しており、その内容について評価を聴いたところ

・**奥能登や鳥羽市の学校現場の報告を聴けたのは良かった。73.7%**

・東日本大震災や阪神淡路大震災、南海トラフ巨大地震などの研究者の講義が良かった。36.8%

・今後の防災・減災教育の手がかりがつかめた。36.8%

・気候変動（教育）と防災減災（教育）の関係が明確になった。42.1%

・**地域のレジリエンス強化と教育のレジリエンスについて考えるきっかけとなった。68.4%**

・自然災害と人為災害との関係について考えるきっかけになった。31.6%

・**災害を地域の特性や地学的な特徴など科学的に考えることが必要だと感じた。57.9%**

・特にない。0%

と回答を得ており、当初の目的を達成できたと考えている。

【講座の運営に関する回答概要】

運営面について、講座の時間は 80%が「適切」と回答した。

・講座を講義と質疑応答・意見交換の 2 部制にしたことに関しては、とてもよいが 72%と毎年前年度を上回ったが、討議時間をより多くが 15%、グループ討議などの工夫がほしいも 15.%あった。

・今後の開催時期や時間に関しては、ちょうどよいという意見が多かったが、**「現場の先生方の負担に懸念」との声もあった。今一度、現場の先生方が参加しやすい方法を模索する必要がある。**

【その他】

・一方で、ESD・SDGs についての学ぶ機会は複数回が 94.7%、学習指導要領に位置付けられていることに関する学ぶ機会も 84.2%と年々機会が増えていることが伺える。**ただ、**

文部科学省が制作した ESD の手引きについては、何度も読んだが 31.6%、一度読んだが 15.8%で合わせても 47.4%となり、50%を下回る状態が続いており、手引きの存在を知っているが読んだことは無いが 36.8%、手引きの存在を知らないが 15.8%となっている厳しい状況が続いている。

ESD・SDGs に関心があるグループでこの状況であることから、この辺りに大きな課題を感じている。

【自由記述】

また、自由記述からは、次のような声も寄せられた。

・持続可能な地域についてシビックプライドの醸成や希少種保全にかかる学校の果たす役割などについて学びたい。

・学ぶことが多くあり、60 歳近い自分でも、若手教員に伝えたいと思った（特に防災教育は、学校現場では絶え間ない課題です）

・2023 年から北陸 ESD 推進コンソーシアムの講座に参加しており、大学での 4 年間で学べなかった教育法について、奈良教育大学の及川先生や現職の先生から講義をいただき、日本の学校現場での ESD 実践に関して学ぶことができ、とても満足しています。

・１つ提案を挙げるならば、現場報告や実践報告も講座では含まれ、かつ教育委員会の方も参加されていたので、小中高の現職の先生方や小中高の学校教員を志望する大学生に対して「研修」の一環として、講座や意見交換を開催することも可能だと思います。ESD に関する資質能力を高め、一人でも多くの現職の先生や教員の卵である大学生が、教育活動の中で ESD を実践できる人材育成を目指し対象を広げていくことが可能かと思います。より多くの現職の先生や教育学部生が参加するようになれば、各教科や教育活動においてどのように ESD を組み込んでいけばいいかといった、ESD を推進するための教材研究や授業実践につながるヒントをディスカッションや講座などを通して得ることができると思います。

○2024 年度 ESD・SDGs 教育実践者交流会
（昨年度までの e ラーニング教材制作協力者交流会を改組）

【開催概要】

主催：北陸 ESD 推進コンソーシアム

目的：今年度の教育現場において重要な課題である「R6 能登半島地震から学ぶ」ことに関して参加者間の情報共有と実践への道筋を探る。

参加者：25 名

2020 年度～2023 年度 e ラーニング教材（実践編）の制作協力者及び関係者及び 2024 年度 e ラーニング教材（実践編）の制作協力者及び関係者（予定者）、北陸 ESD 推進コンソーシアム関係者、関心のある方

日時：2024 年 8 月 23 日（金）17：00～18：30
会場：オンライン（Zoom）
プログラム：
開会挨拶
1.　基調講演
「R6 能登半島地震に学ぶ実践への期待」
奈良教育大学 ESD・SDGs センター　副センター長・准教授　及川　幸彦
2.　実践交流
・気候変動教育や生物多様性など緊急な課題
・地域の SD の課題
・R6 能登半島地震に学ぶ
3.　質疑応答、意見交換
4.　まとめ
5.　事務局からのお知らせ
閉会挨拶

○北陸 3 県における県別報告会、交流会の状況

１．石川県
・北陸 ESD 推進コンソーシアム主催
「石川県 SDGs・ESD 児童生徒学習活動交流会」（**R6 能登半島地震のため中止**）
・珠洲市主催
「R6 年度能登の里山生き物観察会報告会・SDGs 学習取組報告会」
日程：11 月 30 日（土）
生き物観察会は小 3、SDGs 学習取組は小 5 から中 3 までの全校児童生徒が集まり、学校ごとに報告する。
・金沢市主催
「SDGs 子どもフォーラム in KANAZAWA」
日程：2 月 8 日（土）
全校の児童生徒の代表が 2、3 名ずつ一堂に会して、取り組む SDGs 学習の様子を中学校区ごとに交流した後、SDGs 学習に関するシンポジウムを体験する。

２．富山県
・富山市主催～富山市 SDGs ウィーク 連携イベント～
「SDGs-ESD 富山シンポジウム」
日時：2 月 13 日（木）13:30～15:20
場所：Toyama Sakura ビル 5F 大会議室（富山市新桜町）
対象：市内の小・中学校と県内のユネスコスクール等の児童と生徒

主催：富山ＥＳＤ講座委員会

3. 福井県

・勝山市主催

「福井プレゼンテーション大会」

日程：12 月 14 日

場所：村岡小学校

「福井里山里海表彰・発表」

日程：2 月 15 日

場所：村岡小学校

「ESD 担当者会議」（年に 3 回開催）

今年度は、4 月 4 日、12 月 12 日、2 月 21 日に対面で実施

○2024 年度におけるユネスコスクール等の実践報告（e ラーニング教材の対象となる教育実践など）

今年度は、富山県 3 件、石川県 11 件、福井県 1 件、他 2 件の計 17 件について、学校、教育委員会、JICA 北陸、富山ユネスコ協会、能登 SDGs ラボ、能登里海教育研究所、金沢大学・金沢学院大学の学生グループが報告を行った。内容的にも量的にも、今年度の活動の基軸を「R6 能登半島地震に学ぶ」としたこともあり、石川県の能登半島地震関連の報告が多くあり、参加者は能登半島地震に学ぶことができたのではないかと考えている。

この中で今年度特徴的であったのが、ESD・SDGs 学習の実践に伴走する研究者や専門家、地域人材の存在である。児童生徒が探求する学習対象に関する専門性の高い研究者等の協力を得て、探求的で対話的な学習の深まりや教師の教材研究の深まりを実現している報告が複数あった。また、被災地の報告者からは被災地での教育の復旧が早期に実現した背景に、被災前から年月をかけて、先進的な海洋教育や里山・里海教育などを進めるための専門機関や地域関連団体とのネットワークを構築してきたことがあるとの報告もあり、大きな学びとなった。

○補助金事業の概要（文部科学省ユネスコ活動費補助金事業報告２）

【金沢大学：令和 6 年度ユネスコ活動費補助金事業】

「北陸における SDGs 達成に向けた e ラーニング教材開発及びコミュニティづくりによる教員等の専門能力開発」

１．予備調査(訪問・ヒアリング等)

【調査対象】

珠洲市教育委員会、能登 SDGs ラボ、

能登町立小木小学校、能登里海教育研究所

金沢市教育委員会、金沢 SDGs 事務局
石川県立自然史資料館、石川県ユネスコ協会、JICA 北陸、
金沢市立犀桜小学校、小立野小学校、押野小学校、夕日寺小学校、小立野小学校金沢大学付属病院内学級
金沢市キゴ山ふれあい研修センター、金沢 21 世紀美術館、
富山市立堀川小学校、富山市教育委員会、
南砺市教育委員会、富山ユネスコ協会
南砺市立福光かがやき保育園、南砺市立福野おひさま保育園
福井大学、エコプランふくい（福井県温暖化防止活動支援センター）
ふくいユネスコ、勝山市教育委員会、

【調査時期：4 月～9 月】

北陸の 2024 年度は、1 月 1 日に起きた令和 6 年能登半島地震からの復旧も本格化せず、教育現場では児童生徒の多くが、被災地を離れて避難先で暮らし、避難先で学校に通ったり、親元から離れて被災していない他地域の自然体験施設などに集団で非難し学習を始めたりするような状況であり、被災地に残った児童生徒も校舎が使える学校に間借りしたりして新しい学年を開始していた。先生方の多くが被災し家族を失ったり、住まいを失ったりした中で、避難所から勤務地に通い教育現場で新しい年度を迎えていた。また、被災地以外の自治体では、能登を離れて避難してきた児童生徒の対応に十分な配慮がなされていた。

調査期間は、道路や水道、住居など生活、社会インフラがなかなか復旧しない時期であった。コンソーシアムの事務局メンバーで奥能登への調査に車で入ると、平常時の 2 倍から 3 倍上の時間がかかり、復旧の難しさも強く感じた。また、教育現場である学校や教育委員会の厳しい状況や困難な状況も理解することができた。

ただ、一方で学校によって違いはあると思うが、教育の復旧が早い、復旧への決断が早いと感じた。例えば、珠洲市教育委員会では、「物は壊れたが、事は壊れず残っている」との市長の呼びかけに呼応し早急な学校再開と授業の再開を進め、全校で行ってきた小学校 3 年生での生き物調査や小学校高学年と中学校で行ってきた SDGs 学習を進めていた。これも、珠洲市の里山里海教育に伴走してきた研究者や能登 SDGs ラボ、能登半島おらっちゃの里山里海（NPO）などの連携支援が継続可能であることで、学校の実践継続の決断を促したと感じた。そして、長年継続してきた珠洲市内の小中学校の該当学年の児童生徒が全員集まって報告を行う成果報告会も 11 月に継続実施することが予定された。

また、能登町立小木小学校でも 4 月から昨年度と同様の海洋教育のカリキュラムを実践することに決定し、粛々と授業が進められていた。また、小木小学校では 10 月に海洋教育の研究発表会が予定されていたことにも驚かされた。これは、これまで海洋教育の実践に伴走してくれた能登里海教育研究所や漁業協同組合、海上保安庁などの協力が今年度も得られることが確認され、学校として安心して体験的な教育実践ができる確信を得ることができたからであると説明を受けた。驚くとともに被災前の教育実践が紡いできたネットワ

ークが崩れずに残っていたことが教育の復旧を早期に可能にした大きな要因ではないかという仮説を持つことになった。

また、調査の後半の 9 月には能登を豪雨が襲い甚大な洪水被害を受けることになった。この地震と洪水の二重被災という新たな災害に見舞われた中で、懸命に再復旧に向けて尽力する能登の姿に接して、かかる能登半島地震の発災前、発災、復旧復興のプロセスに学び、地域のレジリエンス強化やそれを支える教育のレジリエンスなどについて考え交流する場を創ることが急がれると感じた。

北陸では、富山市の ESD 講座、南砺市の地域学習や自然保育、珠洲市の生物調査、金沢市の子どもフォーラム、勝山市のジオパーク学習など、教育委員会等が ESD・SDGs 学習を積極的に進めており、文科省の「ユネスコスクールの新たな展開」にも相応している取り組みを継続しようとしていると感じた。

一方で、教育センターや校内で行う研修には ESD・SDGs に関する系統的な講座などが設定されていない現状が続いている。また、文部科学省から出されている「持続可能な開発のための教育（ESD）推進の手引き」が、管理職も含めて浸透していない現状も見られた。更に、地域学習等に関するカリキュラムや教材などが固定化し、「こなし」になっていてカリキュラムの形骸化に悩む学校も見られた。

その様な状況下にあって、改めて教員等が地域における SD の課題と出会い、児童生徒と共に課題について探求し協働するプロセスを支援する必要があると感じた。結論が定まらない探求の授業では、対象とする学習対象に関する教師側の広汎で深い理解が欠かせず、その営みを支え伴走してくれる研究者や専門家の存在や学習機会が必要だと感じた。ESD・SDGs について系統的に学べるオンライン講座や、先行する教育実践に出会える e ラーニング教材のような自己研鑽に資する環境と共に、優れた実践に学び合うコミュニティづくりが重要だと改めて再認識した。

また、学び合うコミュニティづくりと学び合うためのリソースについては、北陸 ESD 推進コンソーシアムだけではなく、全国の ESD コンソーシアムとも連携し、互いの教育的リソースを共有・共用できる環境づくりと、ＳＤＧｓを急ぐ必要を改めて感じた。そして、北陸にある多くの SDＧｓ未来都市における人材育成や教育活動の取り組みが連動するよう努力することも重要であると感じた。

予備調査期間ではないが、2024 年 12 月になって全市の小中学校がユネスコスクールに認定されている金沢市教育委員会学校指導課より「令和 7 年度ユネスコスクールの認定について」という標題で「令和 7 年度よりユネスコスクールの認定を解除する。」という内容と手順が示された通知が全小中学校に出された。事前に学校長や校長会への説明がなかったということも伝わってきて困惑した。金沢市の全小中学校と金沢市教育委員会は北陸 ESD 推進コンソーシアムの会員ということもあり、事務局としてこの突然の事態に関する状況を確認するため、金沢市教育委員会学校指導課に説明を求めることにし、12 月 26 日に事務局長以下 3 人の事務局員で学校指導課長と主任指導主事から説明を受けた。説明には ESD や SDGs 学習に関する認識不足も感じ納得出来るものではなかった。ただ、説明の

最後に先の通知を撤回する通知を出すこと、今後は関係者や関係機関との協議を丁寧に進めながら、「引き続き、ユネスコスクール加盟校として、新金沢型学校教育モデルに基づき、持続可能な開発のための教育を推進願います。」とする通知を出す予定であるとの説明を受けた。今後の推移を見守るとともに、これまでも行ってきた事業説明や各種情報提供を密にするとともに、金沢市の担当者も委員となっている ESD 推進連絡協議会での協議・交流の質量の充実に努めることとしている。

２．SDGs・ESD 推進検討委員会（通称：コア会議）の設置と検討状況

（１）SDGs・ESD 推進検討委員会の設置と検討

コンソーシアムのコーディネーターから 12 名をコアメンバーとして推進検討委員会を設置し、オンラインで e ラーニング教材作成等の SDGs・ESD 推進検討のための会合を開催した。

① 5 月 14 日(６名) 〔今年度の活動計画(e ラーニング教材の制作、オンライン講座の開催、教育実践交流会、防災減災教育フォーラム等)、能登半島 地震への対応とその影響を受けた活動計画の変更点、コミュニティ形成支援や教員養成支援〕

② 6 月 12 日（７名）〔富山市立堀川小学校の第９５回教育研究実践発表会の感想、環境教育等促進法の基本方針の決定と ESD-J の車座トークイベント、事務補助員の採用〕

③ 7 月 23 日（８名）〔能登半島地震を受けた教育実践者交流会、オンライン講座、未来都市教育フォーラムの計画、能登半島地震の被災地での教育の継続力や防災教育の重要性、 e ラーニング教材の開発〕

④ 10 月 8 日（６名）〔オンライン講座や北陸の未来都市教育フォーラムの計画、防災減災教育や地域特性に応じた取り組みの重要性、教育的リソースの連携や若い世代のユネスコ活動への参加促進〕

⑤ 11 月 6 日（６名）〔オンライン講座や成果報告会、防災・減災の取り組みやユネスコスクールの活動報告、来年度の成果報告会のプログラム〕

⑥ 12 月 18 日（７名）〔ESD コンソーシアムの連携強化や今後の活動計画、金沢市 教育委員会のユネスコスクール認定解除決定に対する懸念 と対応策、若手の参画促進

⑦ 2 月 5 日（６名）〔今年度の成果報告書関連の協議、来年度以降の 3 年計画に関する意見交換〕

⑧ 3 月予定〔来年度の活動計画等に関する意見交換〕

（２）SDGs・ESD 推進検討委員会が果たした役割の特徴

今年度も富山県、石川県、福井県ごとに担当支援コーディネーターを決め、常時支援ができた。また、富山大学のコーディネーターが仲立ちし、富山市立小学校とマレーシアやタイなどの学校の交流は交流国も交流校も 10 校となった。また、能登半島地震関連でコンソーシアムの支援コーディネーターが授業実践に伴走することができた。

能登の教育活動の継続への支援に入ったり、被災地の学校への児童の支援を届ける活動を仲立ちしたり、学生グループによる能登の学校取材と e ラーニング教材制作を支援するなど貢献できた。また、コーディネーター自身が自らの活動母体での ESD の実践を充実してきている。富山県での「富山ユネスコ協会主催の ESD 講座」、富山市の「富山 ESD 推進プロジェクト」、南砺市の「保育園での自然観察会」、金沢市における「金沢大学付属病院内学級への天体観望機会の提供」「里山オリエンテーリング」など所属する活動母体において、ESD、SDGs を進めるとともに、各県内での交流会、研修会、県ごとのユニット会議なども開催している。

３．SDGs 達成に向けた e ラーニング教材（実践編）の開発

今年度（2024 年度）は、富山県２校、石川県３校、福井県１校、他県の１教育委員会より、延べ８件の報告・実践と、能登里海教育研究所、能登 SDG s ラボ、JICA 北陸、富山ユネスコ協会から計 8 件の実践、金沢大学・金沢学院大学の合同学生グループによる取り組み等３件の実践報告があった。うち 12 件の実践報告に基づいて教材づくりが行われた。

内容的には、今年度の活動の中軸に据えた能登半島地震から学ぶ教材が 8 件、SDGs を意識した地域の ESD の課題や、防災減災、気候変動、生物多様性、被災地の学校との交流などの取り組みが 8 件制作された。特に、能登半島地震関連の教材が 8 本制作できたことは評価できる。「能登半島地震に学び、地域のレジリエンス強化と、それを支える教育のレジリエンス強化について考える」きっかけになる教育実践と教材づくりができたと考えている。

（１）今年度制作した e ラーニング教材（実践編）

SDGs の達成に向けた ESD e ラーニング教材（実践編：１０分前後）を、北陸３県の学校 4 校と教育施設等の連携団体３団体、学生グループ１グループの協力を得て 9 本制作することができた。

教材①　SDGs・ESD を推進するホールスクールアプローチに向けたカリキュラムマネジメント力、教育（学校）経営力の育成

【地域の SD の課題と世界をつなぐ】

・　犀桜小学校における生物文化多様性の教育実践

金沢市立犀桜小学校　教諭　木村　元威（６年生担任）
金沢市立犀桜小学校　教諭　西田　華菜美（６年生担任）
国連大学サスティナビリティ高等研究所 OUIK 研究員
フアン・パストール・イヴァ―ルス

・　富山市における被災地と交流を通した防災・減災教育

富山市立神通碧小学校　教頭　　林　亜希子
富山ユネスコ協会　　副会長　水上　庄子

教材②　SDGs 達成に向けた ESD による探究的で対話的な授業への革新を目指す授業実践（SDGs による「本質的な問い」や「セントラル・アイディア」などを含む）

該当教材なし

教材③　学校と社会教育施設や企業、専門機関等と連携した SDGs・ESD に関わるプログラム開発によるカリキュラムマネジメント力、教育経営力の育成

【社会教育等】

・「ユネスコ教室による ESD 推進」

（富山県）富山ユネスコ協会　会長　高木　要志男

【学校の ESD を支える外部のリソース】（教材⑦からの再掲）

・「地域での学びから持続可能な社会を考える学習機会の創出」能登 SDGs ラボ

・「被災地で学びをつなぐ　能登里海教育研究所の果たす役割」能登里海教育研究所

・「地域と教育のレジリエンス　JICA によるキャパシティ・ディベロップメント」JICA 北陸　研修・開発教育担当

教材④　ホールスクールアプローチを実現するための教育経営力の育成

該当教材なし

教材⑤　教員を目指す学生や大学院生が、学校現場で進む SDGs 達成に向かう ESD の教育実践や実践者に学び、その過程を e ラーニング教材化することで、SDGs 達成に向かう ESD の意義や価値を深く理解する取り組み

【大学生が取材した学校の ESD】

・能登半島地震に学ぶ e ラーニング教材制作学生プロジェクト

金沢大学・金沢学院大学合同学生グループ、（株）ガクトラボ

荒島　蓮、田村　仁、杉村明日香、山科英里菜、小倉　凌

【大学生の ESD 留学体験報告】

・「オーストラリア留学で学んだオーストラリアでの SDGs 教育の実態」

井野口　陽一

教材⑥　幼稚園・保育園における ESD の教育実践

該当教材なし

教材⑦　防災・減災教育や地域の復旧・復興、支援、レジリエンス強化に関する e ラーニング教材

・「2024 年 4 月から「どうやったらできるのか」を考えながら」

能登町立小木小学校　　校長　　倉見　倫代

前校長　加藤　政昭

・「令和 6 年能登半島地震より～学校は歩み続ける～」

輪島市立門前西小学校　前校長　森田　清治

・「鳥羽市の防災・減災教育」

三重県鳥羽市教育委員会　指導主事　川村　和徳

指導主事　濱口　真智子

・「小木小学校　海洋教育の実践」　能登町立小木小学校　教諭　田中　結香

・「被災地で学びをつなぐ　能登里海教育研究所の果たす役割」

能登里海教育研究所　研究員　能丸　恵理子

・「地域での学びから持続可能な社会を考える学習機会の創出」

珠洲市自然共生室　自然共生研究員　宇都宮　大輔

（兼　能登 SDGs ラボ　コーディネーター）

・「海に親しみふるさとにほこりと愛着を持つ児童の育成」

能登町立小木小学校　校長　倉見　倫代

（２）SDGs・ESD　e ラーニング教材（実践編）の制作プロセス

① SDGs・ESD　e ラーニング教材（実践編）の制作校及び制作協力者の公募

② 北陸 ESD 推進コンソーシアムがオンライン開催する交流会、報告会等で教育実践等報告いただき、発表された様子を動画で録画する。

（３）2025 年 1 月現在の e ラーニング教材の公開数と視聴回数

2020 年度に入門編を YouTube にアップしてから 4 年、2 本の基礎編の後これまでに 46 本の実践編を制作し公開してきた。2025 年 1 月までの総視聴回数は約 1 万回に近づいておりと年々伸びてきている。ここにきて公開してからの年数の違いはあるが、視聴回数を伸ばす教材にある傾向が見えてきている。

・基礎編の 2 本は常に視聴回数を伸ばしており、今も基礎編の需要が大きい。

・大学生グループが制作した教材は視聴回数が伸びる。

・ESD、SDGs 学習における探求の基本形が見える教材の視聴回数が伸びる

・地域の SD の課題（持続可能な地域課題）に関する探究学習の視聴回数が伸びる

・カリキュラムマネジメントや学校経営の視点の教材の回数が伸びている。

このような表面的な傾向からだけでは分析は難しいが、詳細な分析を加えて今後の教材制作に生かしていきたいと考えている。

４．ESDコミュニティ創生事業

令和６年度は、令和６年能登半島地震の発災・復旧・復興・支援に取り組みに学ぶことを基軸として、次の４つの軸でコミュニティ創生に取り組んだ。

① eラーニング教材制作協力者を中核としたSDGs達成に向けたESDの授業実践を学び合う授業者や研究者、学生等の開かれたコミュニティの創生

eラーニング教材制作協力者交流会やオンライン講座を中核に、教員、学生、研究者が主体的に学び合い、情報交換するコミュニティづくりを進める。

② SDGs達成に向けたESDを学び合うオンライン講座に参加する受講生（教師や学生）や教育現場を報告する教師、講義する研究者、専門家との交流を充実し開かれたコミュニティの創生

能登半島地震による被災地の復旧・復興やその支援等について学び合うコミュニティを創生する。防災・減災、地域のレジリエンスを強化する取り組みなどについて学び合うコミュニティを創出し、防災・減災教育等に関する教員の指導力、専門能力を開発する。

③　北陸のSDGs未来都市17都市等における人材育成について学び合い交流・連携するコミュニティの創生

北陸には17のSDGs未来都市が認定されており、これらの未来都市が集まるフォーラムも開催されてきた。この間の議論でも人材育成の重要性は強調されてきていることから、未来都市の教育委員会や学校、教員などの取り組みが共有・交流され連携するようなコミュニティの創生にも努力したい。

④　全国ESDコンソーシアムの緩やかな連携の開始、参加コンソーシアムや団体の持つ教育的リソースを共有・共用するコミュニティの創出

この緩やかな連携で合意した5つのコンソーシアムが集まり、北陸ESD推進コンソーシアムが呼びかけ団体として、この件で協議する連携会議を一昨年度から開催協議してきている。今年度中に緩やかな連携の形について合意をして開始を目指す。

５．ESD・SDGs オンライン講座（概要及びアンケート結果については P12 を参照）

今年度のオンライン講座は、開催趣旨に則り防災・減災教育や地域・教育のレジリエンス強化に向けて、令和６年能登半島地震から学び、これからに何をつなぐことができるのか、能登半島地震の被災地からの報告を受け、研究者や専門家、と共に阪神淡路大震災、東日本大震災、南海トラフ大地震をつなぎながら、防災・ 減災教育や気候変動教育、ESD について参加者を交えて計６回の連続講座を設定し討論してきた。

現場の報告では、能登半島地震の被災地にある奥能登の学校現場からの報告がなされ、これから南海トラフ大地震の想定地域である鳥羽市の現場からもその準備状況等の報告を受けることができた。また、途上国支援の現場からということでJICA北陸から、途上国支援における地域のレジリエンス強化と教育のレジリエンスについて報告いただいた。

これらの報告を踏まえながら、能登半島に研究拠点を持つ研究者や東日本大震災や阪神淡路大震災の発災、復旧、復興に尽力した研究者や元教員（研究者）、そして現在想定される南海トラフ地震に構え備える研究者に講義をしていただいた。そして、最終講義として第６回オンライン講座では、これまでの議論も踏まえ ESD・SDGs 学習の専門家による「ESD（教育のレジリエンス）につなぐ」と題して地域のレジリエンス強化と教育のレジリエンス強化の関係等について講義いただき、参加者で協議できた。

今年度の ６ 回連続講座は、これからの防災減災教育のアップデートにとどまらず、これからの人材育成や教育を考える上で多くの示唆を受講者に与えたことは、アンケートの結果からも推察される。

ただ、現役の教員の参加人数が少なく、多忙な現場の状況やそれに伴う働き方改革、研修体制の変化などの中で、一層の工夫と受講環境づくりに注力する必要も感じた。この点については、教育委員会や学校によって、北陸 ESD 推進コンソーシアムの提供する教育的リソースを評価し認証していただき、教員が勤務時間内でも支障のない時間にアクセスできるような環境づくりも考えていきたい。

６．SDGs の達成という観点に立った北陸の教員養成

今年度も、予備調査や相談・支援等で学校に関わったり、アンケート調査をしたりして感じることは、現場の先生方にESDやSDGsに関する教育情報が行きわたらず、学習指導要領における重要性や正しい理解がなされていない現状があるということである。多忙な教育現場の状況と共に、働き方改革の影響の中で、教育委員会の研修削減、オンデマンド化が進み、校内研修による共有機会の減少もあいまって難しい状況であると感じた。特に気にかかったのは、「学習指導要領の前文に「持続可能な社会の創り手」と記載されていることから学習指導要領に準拠した学習、地域学習が行われているので、特段 ESD や SDGs を意識しなくてもこれまで通り実践すれば ESD や SDGs を実践していることになる。」といった考え方で捉えている向きもあり心配された。そこで、今年度も研修機会として個別の支援とともに、研修機会も兼ねて実践者交流会や教育実践交流会、成果報告会など設定と共に、オンライン講座を充実させてきた。オンラインによるライブの講義と質疑応答ができる研修機会として機能したと考えている。

（1）SDGs・ESD 研修機会の提供

① 研修の個別化：学校や先生方、教育委員会の要請に基づき教材化する方法や教材化する教育実践例などについて、コーディネーターが個別に助言等の支援を対面またはオンラインで行った。

② e ラーニング教材制作プロセスにおける研修機会

③ 研修機会の提供（制作協力校や協力者との個別研修は除く）

・ 2024 年度 ESD・SDGs 学習教育実践者交流会（8/23）
・ 2024 年度オンライン講座（9/21、10/5、10/19、11/9、12/7、1/24）
・ 2024 年度北陸ユネスコスクール教育実践交流会（12/7）
・ 2024 年度北陸 ESD 推進コンソーシアム成果報告会（2/1）
・ その他小規模な研修会

④ 研修機会を創出・支援

今年度再評価しているのが、コンソーシアムが学習支援として紹介したケースもあるが、ESD、SDGs学習に伴走してくれる研究者・専門家の存在が教員にとっての研修効果が大きいことである。

主な実績

・ 富山市教育委員会が主催する「SDGs・ESD 富山シンポジウム」の企画・運営に協力した。
・ 今年度は、南砺市立保育園 3 園 6 回の自然観察会（日本自然保護協会が南砺市と連携して実施している自然観察会）に指導員として参加、協力した。
・ 今年度も珠洲市主催の「生き物観察会の報告会（参加者：全小中学校の 3，4 年生全生徒及び担当教員、保護者）」（午前）、「SDGs 学習報告会（対象：全小中学校の小 5，6 年生と中 1，2，3 年生全員）」（午後）の全校の講評をする。（3 年目）
・ SDGs 子どもフォーラム in Kanazawa（金沢市教育委員会主催のフォーラム）の

企画に関する相談に対応する。（３年目）

・ 教員等を目指す大学生や大学院生が ESD を実践する学校現場を取材するという、自主的な学習の場を生み出していた。また、一方で取材を受ける教員もまた学生の問いかけなどを通して、自分の実践を見直す契機となっていたと感じた。

・ 生物文化多様性教育や気候変動教育、自然保護教育、海洋教育などの教育実践に伴走する研究者・専門家等との連携が、授業の質を高めるとともに、教師の専門能力の向上に大きく寄与している。

⑤ 北陸３県のユネスコスクールや大学、教育委員会、企業などで実施している SDGs・ESD に関する大学生や教員、社員、地域住民等に向けた講義や研修会・講習会等の状況

今年度行った北陸 ESD 推進コンソーシアムの会員団体等を対象としたアンケート調査、各会員団体からの定期報告及びコーディネーターからの情報で状況をまとめて以下に報告する。

＜大学＞

これまでも、金沢大学、富山大学、福井大学、金沢学院大学、金沢星稜大学、富山国際大学等において、例年通り一般教養や教職大学院等で複数回の授業が実施されてきたが、この間、次の新たな授業が開講した。

・金沢大学と富山大学の教育系の統合学部における ESD・SDGs 学習に関する基礎と演習の２コースが必修として、定員 160 名で昨年度から開講し、北陸 ESD 推進コンソーシアムの人材や教材を提供している。

・金沢大学大学院教職実践研究科においても ESD・SDGs 学習に関する実践研究の講義が開講した。e ラーニング教材を活用するとともに講師を派遣している。

＜小中学校＞104 校からの 2024 年度の定期報告から（矢印は前年度比較）

・ESD、SDGs の担当の部署・担当者を設けているのは 93.2%↓

・ESD、SDGs に関する学習が教育課程に位置づいているのは 96.1%↓

・ESD、SDGs に関する校内研修を実施しているのは 46.6%↑

（複数回：24.3%、1 回：22.3%、無し：53.4%）

・ESD、SDGs に関する授業公開を行っているのは 18.3%↓

＜小中学校での能登半島地震関連の取り組み＞

「今年度の教育活動等において、R6 能登半島地震に関して、どのような取り組みをされていますか。予定も含めて選択してください。(複数選択可)」

・能登半島地震から学ぶ防災・減災教育　42%

・被災地を支援する教育活動　16%

・能登半島地震の被災状況に関する教育活動　13%

・被災地の復旧・復興に関する教育活動　12%

・被災地を支援するボランティア活動に関する教育活動　9%

・避難訓練の充実　98%

・その他　２％
・特にしていない（予定もしていない）　２％
「その他の取り組み」
・全ての学年において学年の発達段階や個人の環境等を考慮して行っている。
・全学年に対して、避難訓練後の訓話の際に消防士の方に実際に見た能登半島の現状を交えて、避難訓練や備えの必要性について話していただいた。
・全学年で、災害から身を守るためにどのような行動をとるか考えた。第５学年の社会科の授業で、自然災害から身を守るために普段から気をつけたら良いことなどを話し合う。
・全校生徒を対象にして、年 3 回の避難訓練を行った。(3 学期は引き渡し訓練を計画中）地震が起きた場合の避難訓練を行った。
・生徒の心のケア（SC による授業）
・全校で地震や津波を想定した避難訓練
・小中合同の防災教室を開き、「みんなの命を守る」をテーマに、ゲストティーチャー呼び、講義を受けた後、防災に対して「自分たちでできること」について話し合い具体的な提案を行う。
・避難訓練　特別活動
・休み時間、停電になった場合を想定した避難訓練（全学年)、PTA 研修委員会主催の防災教室（全学年・保護者)、６年理科（変わり続ける大地、私たちのくらしと災害）
・全学年で集会や放送等で共有した。・避難訓練の実施と事後指導を行った。・絆の日の話と関連付けて自信の復旧、復興に多くの人が関わっていることを共有した。
・支援のために募金活動をした。
・委員会にて全校に募金を呼びかけ、社会福祉協議会から共同募金として募金を送った。
・全校で被災地支援の募金活動を実施する
・全学年で集会や放送等で上記の内容について共有した。・避難訓練の実施と事後指導を行った。・絆の日と関連付けて、地震の復旧、復興に多くの人が関わっていることを共有した。
・被災地の学校との交流活動、全校
・地震と関連させた防火の発表会　併設している中学校との合同避難訓練
＜教育委員会＞6 教育委員会からの報告や調査から
・ESD、SDGs に関する「児童生徒シンポジウム」「子どもフォーラム」「報告会」「SDGs 学習報告会」「生き物観察会報告会」などを開催し児童生徒の学習交流を進めている。
・ESD、SDGs に関する担当者会（研修会）を設定したり、オンデマンド型の研修教材を視聴できる環境を整えたりしている。

・ESD 推進のためのカリキュラム・デザインを考える教員研修機会などを提供している。

＜その他＞

勝山市教育総務課、富山大学大学院教職実践開発研究科、富山県教育総務課、
福井県教育庁義務教育課、キゴ山ふれあい研修センター、金沢電子出版株式会社
北陸電力、北陸経済連合会、いしかわ動物園、NPO エコプランふくい
（社）大学コンソーシアム石川、（公財）富山市ファミリーパーク公社
（社）環境市民プラットフォームとやま（PEC とやま）
などから報告では、以下の様な研修機会の設定が報告されている。

・ESD 担当者会議
・出前講座で県内の学校に伺っています。内容は自然観察、海ごみ調査、SDGs 講座、気候変動＆温暖化について、主に小学校の授業（４～６年）で 5 月から 11 月（今月）に１５回程度実施しています。
・石川未来プロジェクト：大学コンソーシアム石川が提示した、将来を見据えた大きな課題である未来テーゼに基づき、その目的を達成すべき手段となる具体課題をグループで取り組み、その成果を石川未来会議で報告。
・「動物なるほど教室」「動物標本の貸し出し」など
・ユネスコ教室の開催
6 月 8 日（土）、7 月 6 日（土）、8 月 17 日（土）：体験型ワークショップ「つながりをたどる旅にでよう！」（ユネスコ教室：富山ユネスコ協会と共催）
6 月 9 日（日）：アースデイとやま 2024@富山大学五福キャンパス
6 月 9 日（日）：映画「夢みる給食」上映会&トーク@富山大学黒田講堂
6 月 29 日（土）：SDGs 特別セミナー@富山県民会館「SDGs の今、そしてこれから」講師：新田英理子さん（SDGs ジャパン事務局長）
・学校教育への ESD 支援：高岡龍谷高校、富山県立いずみ高等学校、上市町立陽南小学校（4 年生）他
・南砺市
10/17 SDGs セミナー「SDGs の広がりを人権と市民組織の目線から捉え直す～災害時も平時も誰一人取り残さないことを目指して～」
11/23 南砺市 SDGs カフェ 2024 第 1 回「学生と語り合おう！南砺市の SDGs アイデア」
12/1 流域治水イベント in ファボーレ
12/7、R7.2/22 EPO 中部主催　地域循環共生圏フォーラム in 上市町
12/15 カード「SDGs トーク」を使って SDGs を語ろう（富山市イベント）
12/22 南砺市 SDGs カフェ 2024 第 2 回「自然体験をみんなに！～実践者の活動紹介～」
・R7 1/21~2/5 JICA 2024 年度課題別研修「持続可能な自然資源管理による生物多様

性保全と地域振興-SATOYAMA イニシアティブの推進」（富山～能登・珠洲にて）
・2/8~16 富山市 SDGs ウィークにて各種企画運営　　他
・令和 6 年度 SDG s インクルーシブ教育システム推進事業
・特別支援教育コーディネーターのリーダーの育成（5 月、11 月　研修会を実施）
・名称：研修「ESD 推進のためのカリキュラム・デザインを考える」
内容：講義・演習「SDG s と ESD～『持続可能な社会の創り手』育成のために～」
演習・協議「実践事例を参考 ESD 推進のための教育実践を考える」
講師：金沢大学　准教授　加藤　隆弘　氏
実施時期：令和 6 年 11 月 6 日（水）
対象者：教員（小・中・高・特小・特中・特高）
・里山オリエンテーリング、里山をグループでめぐり人と自然とのかかわりなどを学ぶ春から秋、主に小学 5 年生

7．周知普及とフィードバック及び全国連携

（1）開発した SDGs・ESD を進める e ラーニング教材（実践編）及びオンライン講座等の全国的周知及び成果の発信

① 北陸 ESD 推進コンソーシアムのウェブサイト（HP）、フェイスブック及び YouTube チャンネル「北陸 ESD」での公開と加盟団体・ユネスコスクール等への周知
② 2024 年度北陸 ESD 推進コンソーシアム成果報告会を 2 月 1 日（土）に開催し、文部科学省や ESD 活動支援センター（全国・地方）、全国の ESD 活動拠点、ESD 学会、ESD-J、ACCU、大学や小中高等学校関係者に向けて発信するとともに、リンクしていただく。
③ 引き続き、日本 ESD 学会において、能登半島地震に学ぶことを基軸とした e ラーニング教材制作、オンライン講座（試行）等の北陸 ESD 推進コンソーシアムの活動等について発表した。
④ ユネスコスクール全国大会に参加し、第 1 分科会のパネリストとして北陸 ESD 推進コンソーシアムの活動について報告した。
⑤ SDGs・ESD　e ラーニング教材（実践編）制作協力校を所管する教育委員会や校長会などの関連団体へ周知した。
⑥ 北陸で展開する SDGs 未来都市や ESD 活動拠点へ、活動予定及び e ラーニング教材関連文書等を送付した。
⑦ 文部科学省に e ラーニング教材及びその対象となった教育実践を報告した。
⑧ 互いの教育的リソースを共有・共用する緩やかな連携を図る 4 つのコンソーシアムに、活動情報や成果報告書等を情報提供した。
⑨ 2024 年度珠洲市「SDGs 学習取組報告会」及び「生き物観察会の報告会」（2024 年 11 月 30 日）に講評者として参画
⑩ 信州 ESD コンソーシアム成果報告会（2025 年 2 月 2 日、3 日）に講評者とし、視

聴した後講評する。2 名

⑪ 奈良教育大で開催された「全国 ESD コンソーシアム/ステークホルダー円卓会議 2025」に参加し、北陸 ESD 推進コンソーシアムの今年度の活動について報告するとともに、コンソーシアム間の連携について報告と提案を行った。

⑫ 北陸 ESD 推進コンソーシアムの YouTube チャンネル「北陸 ESD」の周知

e ラーニング教材を公開している YouTube チャンネルを、発出する文書で紹介し北陸 ESD 推進コンソーシアム HP とリンクさせると共に各連携団体の HP ともリンクするなどして周知を図った。

8．本事業の外部評価

（1）外部評価導入の理由：

文部科学省からの補助金を活用する事業の質的向上を図るため、事業計画に外部評価の実施を明記した。

（2）評価対象事業

令和 6 年度ユネスコ活動費補助金：SDGs 達成の担い手育成(ESD)推進事業

（3）外部評価委員

持続可能な開発のための教育推進会議（ESD-J）理事　鈴木　克徳

奈良教育大学 ESD・SDGs センター センター長・教授　中澤　静男

信州大学教育学部附属志賀自然教育研究施設　准教授　水谷　瑞希

（4）外部評価時期と方法（省略）

（5）外部評価の活用

2 月 1 日の報告会における自己評価及び外部評価については、事業結果説明書及び次年度の企画書作成に反映させる予定である。

（6）外部評価の概要

（持続可能な開発のための教育推進会議（ESD-J）　代表理事　鈴木　克徳）

金沢大学は、令和 4 年度から「SDGs 達成に向けた e ラーニング教材開発及びコミュニティ作りによる教員等の専門能力開発」プロジェクトを実施し、令和 6 年度はその 3 年目に該当する。このプロジェクトの 3 年目における主な成果と課題については、以下のとおりである。

1．全般

・北陸地域は、100 以上のユネスコスクールが認定されており、北陸 ESD 推進コンソーシアムを通じて長年にわたり ESD 活動が推進されてきた。継続は力というが、そのような継続の成果が表れていることは高く評価される。

・令和 6 年 1 月 1 日に発生した能登の地震に伴い、本プロジェクトも能登の震災対策が教育に及ぼす影響について取り組むこととし、計画に一部修正が生じたが、能登への取り組みはタイムリーであり、計画の修正は適切であったと考えられる。

・ユネスコによる教育勧告の50年ぶりの改定や第4期教育振興基本計画、学習指導要領の改定に向けた諮問等で明らかなように、教育の在り方に関し大きな変革期が訪れている。そのような変革は、ウェルビーイングへの取り組みを促進するとともに、ESD を教育の中核に位置付けるものであり、更なる ESD の推進に向けた北陸 ESD 推進コンソーシアムの一層の発展が期待される。

２．ESD 推進に向けた新たな取組等

・令和6年度から、以下の活動を始めする様々な新たな取組が着手された。

・北陸 SDGs 未来都市人材育成・教育フォーラム 2025

・全国 ESD コンソーシアムの連携開始

・ESD・SDGs オンライン講座の充実

・また、令和 6 年度には、e ラーニング教材の開発等に関し、従来にも増して詳細な予備調査が行われたことも高く評価される。

・これらの活動は、優れた試みであるが、まだ端緒段階のものもあり、改善の余地があるように見受けられるものもある。今後継続・発展させていくことが強く期待される。

３．SDGs 達成に向けた e ラーニング教材開発及びコミュニティ作りによる教員等の専門能力開発事業

・文部科学省ユネスコ活動費補助金による本事業は、①e ラーニング教材開発、②ESD コミュニティ創生、③教員養成、④周知普及という 4 本の柱で構成される。令和 6 年度には、それらに足して、能登の震災対策からの学びという視点が加わっている。

〇e ラーニング教材開発

・e ラーニング教材の作成に関しては、令和6年度には、合計19件の実践に基づく教材作りが行われ、11 本の e ラーニング教材が作成された。その中には、能登の被災に関連するものも含まれたことは評価に値する。しかし、本年度は、教材作成のプロセスが必ずしも公開されず、外部の方々からの意見をもらう機会が十分に得られなかったように思われる。制作段階における意見聴取には、教材の質向上に向けて大きな効果が期待されるので、今後の制作に際しては、配慮することが期待される。

・また、当初掲げた 7 つのテーマのうち、3 つについては該当する教材作り行われなかった。例えば、探究的で対話的な授業への革新を目指す授業実践については、北陸に数校ある高等学校、高等専門学校のユネスコスクールへアプローチすることにより実施可能になると思われるので、それらの中等教育学校へのアプローチの強化が望まれる。

〇ESD コミュニティ創生

・ESD コミュニティの創生に関しては、能登の被災をテーマにした6回のオンライン講座を始めとして、SDGs 未来都市 17 都市等における人材育成のためのコミュニティづくり、全国の ESD コンソーシアムとの緩やかな連携の創出等、様々な努力がなされたことは評価できる。

・しかしながら、例えばオンライン講座は、北陸ユネスコスクール教育実践交流会と同時開催した第 5 回の 38 名を除き、10～20 名の参加にとどまる等、コミュニティ形成という観点からは十分な成果が挙がっているとはみなしがたい。また、SDGs 未来都市のコミュニケーションづくり、全国コンソーシアムとの連携についても、まさに開始した段階であり、今後改善すべき課題は多い。
・コミュニティ作りは長期間の忍耐強い努力が不可欠であるため、短期的な評価は避けるべきであるが、今後とも努力を継続し、確固たる ESD コミュニティが北陸において、さらには全国の関係者と結んで、確立されることが期待される。
〇教員養成
・北陸 ESD コンソーシアム主催の活動もあるが、大学、教育委員会、地域のユネスコ協会等が主催する様々な研修が行われ、学校教員及び教育系の学生が裨益を受けた。このように、活動の主体が教育委員会や大学、ユネスコ協会等になっていくことは基本的に好ましい傾向と考えられるため、その一層の促進が期待される。他方、石川県だけでも 20 を超える大学等高等教育機関があり、それらの大学等における教員養成課程への SDGs、ESD に関する授業の導入促進が期待される。
・当初企画した e ラーニング教材の活用については、必ずしも明確でない。これまで蓄積した様々な e ラーニング教材が、より積極的に活用されるような工夫が期待される。
〇周知普及
・北陸の活動の周知普及に関しては、最近の数年間で大幅な進展が見られたと評価できる。北陸 ESD 推進コンソーシアムのホームページや SNS に加え、ユネスコスクール公式ウェブサイトに北陸 ESD 推進コンソーシアムのバナーが作られ、全国のユネスコスクールが北陸の取組にアクセスできるようになったことは重要な進展である。さらに、日本 ESD 学会の研究大会やユネスコスクール全国大会等で発表を行うことにより、北陸地域内だけでなく、全国的な周知普及が進んでいる。
・北陸の SDGs 未来都市の SDGs・ESD に係るネットワーク、全国の SDGs・ESD コンソーシアムのネットワーク形成等が新たに試みられたことは評価できる。これらの試みは、まだ端緒段階にあるため、今後更なる発展・改善が期待される。

４．今後の課題
〇e ラーニング教材の活用（実績の検証と、更なる活用促進に向けた取組）
・これまでに北陸 ESD 推進コンソーシアムでは、様々な活動成果を生み出してきた。代表的なものとして e ラーニング教材がある。e ラーニング教材に関しては、これまでに総視聴回数が約 1 万回と報告されているが、本当に教材すべてを視聴したものかどうか、それぞれの視聴時間を確認することにより、検証することが望ましい。数秒とか、1、2 分以内の視聴というケースも想定されるため、最後まで視聴した回数がどの程度か確認することは大変重要である。
・e ラーニング教材（基礎編）は、視聴回数も多いとされるが、作成年次が古いため、

最新の情報を踏まえてアップデートすることが強く期待される。
・上記の指摘とも関連するが、既に 40 本以上作成されている e ラーニング教材（実践編）の一層の活用方策について検討することが期待される。既に作成されている教材を、テーマ別、校種別に整理し、視聴者が関心を有する事項に速やかにアクセスできるような目録作りが有益と考えられる。また、大学や教育委員会等と教材情報を共有し、それらの機関による講義や研修に活用いただくよう働きかけることも有益と考えられる。

〇各種イベントと ESD コミュニティの創出
・様々なイベントが企画され、優れた発表が多数行われたが、個々の発表時間が十分でなく、消化不良気味との指摘もあった。1 回の発表数を絞ることにより、せっかくの優れた取組に関する質疑応答や意見交換の時間をしっかり確保することが望まれる。
・教員養成に関しては、オンラインセミナー等への参加者の確保が課題である。小教研、中教研などの既存の仕組みと連携することにより、イベントの参加者や教材の裨益者数の増加を図ることも一案と考えられる。
・近年企業との連携が弱まっているとの印象がある。北陸でも多くの企業が SDGs に取り組んでおり、出前授業や工場視察等の可能性がある。北陸経済連合会や、金沢信用金庫、能登信用金庫等の環境や SDGs に深くコミットしている金融機関との連携を模索することが期待される。
・ESD コミュニティという観点からは、大人のコミュニティだけでなく、大学生や、さらには中高生、場合によっては小学校高学年の生徒たちも巻き込んだコミュニティの掲載を志向することが望まれる。

（奈良教育大学 ESD・SDGs センター センター長・教授　中澤　静男）

令和６年度北陸ＥＳＤ推進コンソーシアム事業の成果報告書及び２月１日に開催された報告会に基づき、３点から外部評価を行う。

１つ目は伴走・連携の重要性についてである。2 月 1 日に開催された報告会では、北陸 3 県の６つの学校におけるＥＳＤ実践と、E ラーニング教材制作学生プロジェクトが報告された。6 つの学校のＥＳＤ実践の共通点は、専門家などの伴走者の存在や地元の消防団やユネスコ協会、企業などとの連携である。専門家などをゲストティーチャーとして招へいすることは、ＥＳＤではよく行われているが、連携における課題は社会教育と学校教育の違いである。専門家は説明をしてしまいがちであるが、答えを言ってしまうと、子どもの理解は進むが学習意欲は低下しがちである。自分事化が進まず、「やらされ」感が残るだけで、持続可能な社会の創り手は育たない。その点、６つの実践は、伴走・連携の成功例である。伴走者や連携機関と学校の日ごろからの関係性やプラットフォームの運営、事前打ち合わせの留意点を紹介していただけると、報告会を視聴した

教育関係者にとってさらに有益であったと思う。特に感心したのは、富山市立神通碧小学校の防災教育におけるユネスコ協会の果たした役割である。学校への学習テーマの提案から始まり、地域の関係機関との連絡調整、予算の獲得まで、ユネスコ協会の協力として完璧である。全国のユネスコ協会の研修会でこの事例を紹介し、学校とユネスコ協会の連携を進めていただきたいと思った。

２つ目は研修のタイミングについてである。１月１日の能登半島地震に加え、９月２１日の奥能登豪雨災害の被災地支援として教育には何ができるかを問う一年であったと思う。２０２４年度ＥＳＤ・ＳＤＧｓオンライン講座が６回開催されたが、地震や豪雨災害の事実とそれに対する防災・減災の取組を学ぶ内容である。ＥＳＤは学習内容が多岐にわたっており、教育者にとってその基本を学ぶことは重要である。しかし、今だからできることについて学ぶことはさらに重要である。ＥＳＤにおいては、子どもの学習意欲を高めたり、当事者意識を育てたりすることの重要性がいわれているが、教員研修も同じであろう。北陸ＥＳＤ推進コンソーシアムが、防災・減災教育に焦点化し、研修されたことは時宜にかなったものであるといえる。

３つ目はウェルビーイングとＥＳＤの関係性についてである。被災に伴い、これまで当たり前にやってきた学習支援や伝統行事ができない状況となった。規模を縮小したり、時期をずらしたりしてでも継続しようと取り組む過程で、学習支援や伝統行事の意味や意義を考える機会となったものと思われる。被災状況の中での実施は苦労が多かったとは思うが、この努力が子どもや地域の人たちの生きる力につながっていると実感されたことで、ウェルビーイングが向上したことは間違いない。あらためてＥＳＤの価値に気づかされた思いである。

（信州大学教育学部附属志賀自然教育研究施設　准教授　水谷　瑞希）

今年度の北陸 ESD 推進コンソーシアムの活動について、e ラーニング教材の制作と能登半島地震を契機とした防災・減災教育に関する取り組みを中心に述べる。

e ラーニング教材の制作において、制作プロセスそのものが参加者のスキルアップやコミュニティ形成につながったとの指摘は重要である。現職教員や大学生が地域の課題に向き合いながら教材を構築することで、単なる教材制作にとどまらず、連携の輪を広げると同時に、ESD 推進のコアとなる人材の層を厚くする成果を生み出した。今後は、この経験や学習コミュニティを一過性で終わらせず、持続的に深化させる仕組みをどのように整えていくかが、大きな鍵となると考えられる。e ラーニング教材は現在までに 46 本の教材が公開され、総視聴回数は約 1 万回に達するなどの成果が得られているが、これら教材の充実だけでなく、その制作過程で育まれた連携をいかに継続・深化させるかが今後の課題となるといえる。

能登半島地震を契機とした防災・減災教育に関連する取り組みは、教育の持つレジリエンス強化の可能性を示した。被災地の学校では、海洋教育や里山・里海教育など、地

震以前から継続してきた学びが早期復旧に寄与し、防災・減災の意識を高める契機ともなった。また、コンソーシアムは、これらの経験や知見を全国へ発信し、北陸地域のSDGs 未来都市が参集するフォーラムでは、震災から得られた学びを人材育成へつなげる方向性が議論された。これらは地域に密着して支援活動を展開する地域ESD拠点にしかなし得ない取り組みである。

全般的な課題として、近年、教職員の多忙感がESD実践を阻む要因として改めて浮き彫りになっている。働き方改革の影響もあり、オンライン講座などに参加しづらい現状は、コンソーシアムが提供する学習機会の活用を難しくしている。さらに、カリキュラムが固定化し、ESD が形骸化してしまう背景にも、こうした教職員の負担増があると考えられる。教職員の負担軽減を喫緊の課題とするこの状況下において、ESD 実践が軽視される事例もしばしば耳にする。しかし、ESD は学習指導要領で明確に位置づけられ、既存の教育活動と統合されるべき視点である。本来は教科の学びを深める機能を担うものであり、決して「追加負担」ではないはずだ。それゆえ、とくに管理職層に対してESD の効果や役割をどのように伝え、実践に対する動機づけを高めるかが、今後さらに重要になると考えられる。また、ホールスクール・アプローチでESDを捉え、カリキュラムマネジメントや教育の質向上はもとより、学校運営や教職員の働き方改革と結びつけるようなモデルを提示する必要があるといえる。

ここにおいても、能登半島地震を契機とした防災・減災教育の事例は、地域の復旧・復興と連携しながらESDがいかに力を発揮するかを示す好例である。災害時の教訓や地域のレジリエンスを学ぶことで、SDGs の理念を実践レベルに落とし込む学びが可能になる。今後は、得られた知見を他地域へ発信するとともに、防災・減災教育に関する教育プログラムを体系化していくことを期待する。

９．本事業の総括と展望

【本事業の概要】

今年度（2024 年度）は、「SDGs 達成に向けた e ラーニング教材開発及びコミュニティづくりによる教員等の専門能力開発」事業３年計画の 3 年目（最終年度）であった。しかし、令和 6 年 1 月 1 日に能登半島地震が発生し、その被災地支援とともに発災・復旧・復興から学ぶことが喫緊の課題となった。そこで、計画の３年間（2022～2024 年）の主要３事業を継続する中で、その喫緊の課題を優先して取り組むこととした。特に、教育分野の復旧・復興を担う教員や学生が、防災・減災など地域のレジリエンスを高める指導力、専門能力の確保に向けて実施することとした。

そして、この取り組みを進める中で、これからの地域のレジリエンス強化に役立つ e ラーニング教材開発や、共に能登半島地震などから学び次に備えるとともに、地域のレジリエンス強化ためのオンライン講座を実施した。被災地の学校現場や教育委員会の現状や教育実践の報告、令和６年能登半島地震や阪神淡路大震災、東日本大震災から学び今後に繋ぐこと、南海トラフ巨大地震に備える教育現場の状況と研究者の知見から学べる機会を提

供した。また、今後の防災減災教育や地域のレジリエンス、支える教育のレジリエンス強化について考える機会も提供できた。これらに加えて例年通り、教育実践者交流会、ユネスコスクール教育実践交流会や成果報告会などを開催し互いの実践を交流し合う機会を作り、地域のレジリエンスにと止まらず ESD・SDGs 学習全般にわたって学び合うコミュニティの構築に力を注いだ。

また、事業から生み出される教育的リソースについて全国の ESD コンソーシアム等において共有・共用ができる連携体制の構築を図ったり、北陸の SDGs 未来都市の間で、教育や人材育成について学び合えるコミュニティを構築すべく取り組んだ。

『令和 6 年能登半島地震の発災・復旧・復興から学ぶ』2024 年度となるよう事業を進め、以下に述べるように多くの成果があったが、幾つかの問題点や新たな大きな課題も明らかになった。

【成果と課題】

〇SDGs 達成に向けた e ラーニング教材（実践編）の開発

（1）2024 年度も富山県、石川県、福井県、他県の学校や教育委員会から 8 件、能登里海教育研究所、能登 SDGs ラボ、JICA 北陸、富山ユネスコ協会などの諸機関から 8 件、金沢大学・金沢学院大学合同学生グループによる取り組みなど 3 件、計 19 件の報告や実践に基づいて教材づくりが行われた。**特に、能登半島地震関連の教材が 8 本制作できたことは評価できる。「能登半島地震に学び、地域のレジリエンス強化と、それを支える教育のレジリエンス強化について考える」ことのきっかけになる教育実践と教材づくりができた。**

（2）**教材開発のプロセスから能登半島地震の被災地において教育の復旧が早く実現できた大きな要因として、被災前から取り組んできた海洋教育や里山里海教育など先進的な教育活動を 10 年以上にわたり継続し、その教育活動に伴走する研究者や専門家、協力関係団体のネットワークを構築してきたことが浮かび上がらせることができた。**

（3）今年度で 4 年目を迎える学生グループが教育現場に取材に入り ESD や SDGs の教育実践に学び、その学んだことを教材化する取り組みを、現場に行くことすら困難な被災地の教育現場に何度も赴き教材を制作できたことも特筆できる。**教員を目指す彼等にとって、養成課程で学ぶことのできない貴重な財産、教員となるための原体験になったのではないかと考えている。また、今年度初めて現役学生による留学体験を報告してもらい教材化できた。海外の大学で ESD や SDGs に関する学習を経験したことを共有できることも重要であると再認識した。この様に、ユース層（若手教員、学生、高校生）が ESD や SDGs に関した自主的な取り組みを語り合い協働できるような仕掛けづくりが急務であると実感できたことも特筆できる。**

（4）大学において、北陸 ESD 推進コンソーシアムが保有する教育的リソース（e ラーニング教材や人材など）が活用され始めてきたことである。教育委員会や義務教育学校、高校の研修会などへのコーディネーター派遣や e ラーニング教材提供などはこれまでも行われてきたが、**教育系大学院や学部における必修及び選択の単位認定される講座が**

組まれ、講師としての人材提供と共に、作成してきた e ラーニング教材の活用などがシラバスに組み込まれつつあることも特筆できると考えている。

（5）3 年前に e ラーニング教材開発の過程で誕生した野外教育施設のプログラムである金沢キゴ山ふれあい研修センターの「里山オリエンテーリング」が今年度は石川県内外の年間 39 校が利用し約 2850 人の児童生徒や大学生が体験する活動にまで成長している。

また、北陸 ESD 推進コンソーシアムのコーディネーターである大学教員が、一昨年度から日本自然保護協会と連携した南砺市立保育園での自然保育・自然観察会の取組を進め、昨年度教材化したりオンライン講座で保育士が集まって学び合ったりしたことで、今年度においては、南砺市で予算化され今年度も保育園での自然保育・自然観察会が継続されていることも特筆できる。

（6）2021 年度から 4 年目を迎えた金沢大学付属病院内学級向けのオンライン天体観望の取組は、今年度も金沢市キゴ山ふれあい研修センターと金沢星の会、北陸 ESD 推進コンソーシアムのパートナーシップで継続されており、院内学級の教員や児童生徒を勇気づけている。また、この教材に触発された金沢２１世紀美術館と支援ボランティアによって、院内学級向けの美術館オンラインツアーが 2022 年度から始まり今年度も継続されている。この様に、e ラーニング教材によって新たな ESD 活動が生まれ広まっていく可能性を示しており、高く評価できると考えている。

（7）北陸 ESD 推進コンソーシアムのコーディネーターが自らの出身母体である地域ユネスコ協会の活動として、気候変動教育についてユネスコ講座を大学や NPO 法人と連携して複数回実践され、その意義を伝える e ラーニング教材が制作されたことの意味は大きいと考えている。これまで地道に継続してきた地元のユネスコ活動の ESD・SDGs 的な価値を再認識するとともに、地域の SD の課題と地球規模の課題とを結ぶ可能性を再認識することができた。

（8）これまでの e ラーニング教材 48 本の視聴回数は 9982 回（2025 年 2 月 27 日現在）となり、1 万回超え目前に迫ってきており、順調に視聴回数の増加は推移してきている。しかし、視聴後のアンケートへの回答にはつながっていないという課題が続いている。

○ESD コミュニティ創生支援事業

令和 6 年度は、令和 6 年能登半島地震の発災・復旧・復興・支援に取り組みに学ぶことを基軸として、次の 4 つの軸でコミュニティの創生と育成に取り組むことができたことは大きな収穫であった。

①ラーニング教材制作協力者を中核とした SDGs 達成に向けた ESD の授業実践を学び合う授業者や研究者、学生等の開かれたコミュニティの創生

②SDGs 達成に向けた ESD を学び合うオンライン講座に参加する受講生（教師や学生）や教育現場を報告する教師、講義する研究者。専門家との交流を充実し開かれたコミュ

ニティの創生
③北陸の SDGs 未来都市 16 都市等における人材育成について学び合い交流・連携するコミュニティの創生
④全国 ESD コンソーシアムの緩やかな連携を開始し、参加コンソーシアムや団体の持つ教育的リソースを共有・共用するコミュニティの創出

（1）特に、今年度は上記の①②を重ねる形で、令和６年能登半島地震による被災地の復旧・復興やその支援等について学び合うコミュニティを創生し、防災・減災、地域のレジリエンスを強化する取り組みなどについて学び合うコミュニティに成長するきっかけを作れたと感じた。連続６回のオンライン講座には、北海道や九州、屋久島、など全国からの参加者も加え、延べ 118 名の受講者が参加した。

また、このコミュニティの中で、参加した教育関係者や研究者・専門家そして主催者もまた、地域のレジリエンスを強化するためには、教育のレジリエンスが鍵を握っているとの思いを強めることができた。一方で、被災地で被災前から進めてきた海洋教育や里山・里海教育といった先進的な教育への取り組みと、それを支えるためのネットワークづくり（金沢大学、国連大学、能登 SDGs ラボ、能登幸海教育研究所、関連団体や諸施設などとの連携）が、教育の再開、復旧を助け継続に寄与していることもコミュニティの中で共有できた。これも大きな収穫であった。

しかし、一方で１月の能登半島地震と９月の能登を襲った豪雨災害という二重被災から、学ぶべきことは多くあると推察され、これまでの防災・減災教育では不十分であることも気づかされた。地域の防災・減災や地域のレジリエンスを強化するためにも、地域の特殊性に関する理解を深めることと、地球規模で起きていることの関連で考えることの重要性の再確認を迫られた。また、そのためにも、教育、人材育成において科学的なリテラシーの獲得等に関する教員の指導力、専門能力を開発することは急務であるとも感じた。

また、昨年度のオンライン講座の内容として位置付けた「保育園での自然保育」はたくさんの保育士さんの参加を実現したが、今年度はその中心講師であった北陸 ESD 推進コンソーシアムのコーディネーターによって形を変えて指導者養成講座（通年）として引き継がれ、多くの幼児教育関係者が受講し、昨年生まれたコミュニティが継続していることも意義深かった。

（2）上記の③については、北陸には 17 の SDGs 未来都市が認定されており、これらの未来都市が集まるフォーラムも開催されてきた。この間の議論でも人材育成の重要性は強調されてきていることから、未来都市の教育委員会や学校、教員などの取り組みが共有・交流され連携するようなコミュニティの創生にも努力したいということで、「北陸 SDGs 未来都市人材育成・教育フォーラム」を行い、各未来都市の人材育成や教育分野の担当者が能登半島地震に学びこれからの人材育成や教育に関して情報共有と考えるきっかけづくりを７都市の参加で行えたことは一つの成果であった。

また、6 人の地元研究者や専門家が、「能登半島地震から学び、これからの人材育成

や教育について考える」車座トークを各都市の担当者やその他の参加者に視聴してもらい質疑応答ができたことは、今後のコミュニティ形成の一歩を踏み出せた思いである。

（３）④の「全国 ESD コンソーシアムの緩やかな連携を開始し、参加コンソーシアムや団体の持つ教育的リソースを共有・共用するコミュニティの創出」であるが、一昨年の２月に奈良教育大で開催された「全国 ESD コンソーシアム/ステークホルダー交流会 2023」において、「全国の ESD コンソーシアム間での e ラーニング教材やオンライン講座などの教育的リソースの共有、共用の推進」北陸 ESD 推進コンソーシアムが呼びかけ、その後 5 地区の ESD コンソーシアムで連携協議会を継続開催し、コンソーシアム間での共有、共用に向けた合意が形成され、その緩やかな連携の形も決まり、来年度から互いの教材や講座などのリソースを、互いに共有・共用できることになった。多様性が豊かな緩やかな大きなコミュニティへの期待も高まり、互いの地域の特徴や特色にあふれた教育実践や、個性あふれる教員と出会える機会が増える期待も高い。

このことに基づき 2025 年 2 月 22 日に開催された「全国 ESD コンソーシアム/ステークホルダー交流会 2025」において、この緩やかな連携の形を報告し更なる参加を呼び掛けた。今後の連携の広まりに期待をしている。

（４）ESD・SDGs オンライン講座（ライブ）　アンケート（P12 参照）から見た成果

・３年目もオンライン講座を受講した事後アンケート調査からは、受講者の 100％が「とても良かった」「良かった」と回答し、非常に満足度の高い講座となった。

・参加者では現役の教員の参加者が増えにくい状況であり、アンケートのコメントにもあった「参加することへの負担感を心配する」との声もあり、働き改革との関係の難しさもあり、今後の大きな課題である。

・運営面について、講座の時間（90 分）は 84.6％が「適切」と回答したが、協議時間の持ち方についてはグループ討議、協議時間を増やすなど工夫する必要があるとの意見もあった。開講シーズン、開講曜日、開講時間についても、回答にバラツキが今年度も多いことから、教員等のニーズについては改めて検討が必要だと考えている。

（５）**教員養成及び支援**

・これまでに制作してきた e ラーニング教材の視聴が進んでいる。YouTube の北陸 ESD チャンネルで公開している 2 年前の SDGs・ESD に関する e ラーニング教材の視聴回数が、2025 年 2 月 27 日現在で 9982 回となり、1 万回を超え目前となり年を重ねて進んでいることが伺える。

・e ラーニング教材とは異なるアンケート調査によると、調査によるバラツキはあるが回答した教員（ESD・SDGs に関心のある層）の概ね半数が視聴していると思われる。

現場の教員の教材研究や自己研鑽に少なからず貢献していると考えている。また、校内研修や大学での授業、個人研修として利用されていることも報告を受けていることからも一定貢献していると考えている。

・教員の働き方改革が求められる学校現場では、カリキュラムマネジメントが難しい情況にある。その中にあって、学校現場の教員がSDGs達成に向けたESDの授業実践やカリキュラム開発が行うプロセスにおいて、学習対象に関する研究者や専門家、関係諸団体等が伴走することで、探求の質を高めるとともに教師の教材研究を深めていることは特筆できる。また。この様な大学や研究施設等との橋渡しをすることがコンソーシアムの役割として再認識することが重要であると感じている。

・今年度も国内外の学習交流や NPO などの団体や社会教育施設、保育園と連携した実践を各県のコーディネーターが支援に入って教員、保育士と対話を積み重ねることができたことも支援となっていると考えている。

・今年度は、金沢大学と金沢学院大学の大学生グループが、珠洲市と能登町の教育現場に入り、能登半島地震から学ぶことを目的に教材作りを行うことができたことも評価できる。学校現場の ESD・SDGs 学習の先進的な取り組みを応援することができたと考えている。

・2021 年度から 4 年目を迎えた金沢大学付属病院内学級向けのオンライン天体観望の取組は、今年度も金沢市キゴ山ふれあい研修センターと金沢星の会、北陸 ESD 推進コンソーシアムのパートナーシップで継続されており、院内学級の教員や児童生徒を勇気づけている。

・今年度も北陸 ESD 推進コンソーシアムのコーディネーターが、自らの活動母体である県ユネスコ協会や公民館、自然保護団体、地域の一員として活動したことを基に、e ラーニング教材を制作したことも特筆できると考えている。コーディネーターもまた、自らの活動母体の活動を進め、教材化することは原点回帰であり、今後も重要であると考える。

（6）周知普及

コンソーシアムの活動で得られた成果を第一義的には、北陸内で共有するための場を例年通りオンラインで設け、北陸 SDGs・ESD 推進連絡協議会（2 回)、教育実践者交流会（旧 e ラーニング教材制作者交流会）(1 回)、北陸ユネスコスクール実践交流会（1 回)、北陸 SDGs 未来都市人材育成・教育フォーラム（1 回）北陸 ESD 推進コンソーシアム成果報告会（1 回)、などを主催し、ESD・SDGs オンライン講座（6 回）

今年度は、全国規模、北陸以外で開催される学会、大会、交流会等へも積極的に参加及び発表、報告を行った。

・2024 年度日本 ESD 学会で実践報告

・2024 年度珠洲市「SDGs 学習取組報告会」及び「生き物観察会の報告会」に講評者として参画

・2024 年度ユネスコスクール全国大会にパネリストとして参加

・2024 年度金沢市主催の「SDGs 子どもフォーラム」に企画で参画

・2024 年度富山市 SDGs シンポジウムの企画、開催、運営に協力

・信州 ESD コンソーシアム成果報告会に講評者として参加

・全国 ESD コンソーシアム/ステークホルダー交流会 2025 に参加し活動を報告するとともに全国 ESD コンソーシアムの連携を発表

・今年度も連携団体と HP のリンクを貼るとともに、YouTube チャンネルとのリンクやフェイスブックとのリンクを通して情報を発信している。

・YouTube の北陸 ESD チャンネルで公開している。

【今後の展望】

○「能登半島地震に学ぶー地域のレジリエンス強化と教育のレジリエンス」に関する 2 年目の取り組みを進める。

・これからの地域・教育のレジリエンスを強化するためには、探求対象の研究者・専門家、研究所・関係機関、地域の関係団体などの伴走が極めて重要なことから、かかるネットワークを構築する。

・学生グループ等による被災地取材（学校や研究所など）の対象地域を拡大するとともに、学生グループを複数とし、継続する。

・SDGs 未来都市人材育成・教育フォーラムを教育委員会の参加も促し継続開催する。

○SDGs 達成に向けた e ラーニング教材開発と活用（ESD・SDGs オンライン学習コース等の開設）

・これからの探求学習をカリキュラムマネジメントする教師にとって、教育学的なアプローチと学習対象へのアプローチの両方が重要であることから、その二つのアプローチに寄与する研究者・専門家、研究所・関係機関、地域の関係団体などが伴走するオンライン講座や研修会を開催する。

・文部科学省によるユネスコスクールへの通知や ESD の手引き改定に基づき、ESD の実践には、教科や総合の授業をより深くより対話的行うための考え方やカリキュラムマネジメント力を開発してくれる魅力と、ホールスクールアプローチの可能性があることが伝わることを重視する。最新の ESD の状況とともに、国際的な枠組みとしての ESD の基本についても学べるような基礎的な教材についても再検討する。

・これまでの教材を活用したオンライン講座やオンデマンド型講座をなどによるオンライン学習コース（案）を開設する。

○ユースによる ESD コミュニティ創生支援事業

・若手教員や教員を目指す学生、高校生など、ESD や SDGs に関心を寄せるユースのコミュニティをユースの手によって創出育成する仕組みづくりを、既存の教育制度の中と共にその枠組みの外でつながる仕組みづくりを新たな活動の主軸とする。（例：各県のユネスコ協会などと連携して、ユース主体のユネスコクラブなどの設立と活動を進める。そのため、ユースによる設立準備会を設置するなど準備を進める。）

・そのため、北陸 ESD 推進コンソーシアムが呼びかけ北陸の金沢大学、富山大学、福井大学、国連大学サスティナビリティ研究所 OUIK、JICA 北陸などと連携しユースによる ESD for SDGs のコミュニティの創出する環境づくりを行う。

・SDGs 達成に向けた ESD もチャレンジする若手教員の専門性の開発を、自発的で自律

的に行うことに伴走する研究者、専門家、関係組織・団体とつながることができるような仕組みづくりを進める。

○全国 ESD コンソーシアム連携を拡大、深化させる。教材や人材の共有、共用、講座や研修会の相互利用などを進める。また、互いのユースの交流ができるよう準備する。

○若手教員等が勤務時間内にオンラインや対面で、研修機会に参加したり教材研究のためのコンテンツにアクセスしたりできるような環境づくりを進める。

○ESD・SDGs に関する学会や研究会に教員と研究者、教員を目指す学生などが共著の形で研究論文や報告書を作成発表する共同実践、共同研究、共同発表を旨とした教育実践を進める。

資料

■ 2024 年度「SDGs 達成に向けた ESD」を学ぶオンライン講座の様子

第 1 回　講師：国連大学サスティナビリティ研究所 OUIK　研究員　小山　明子

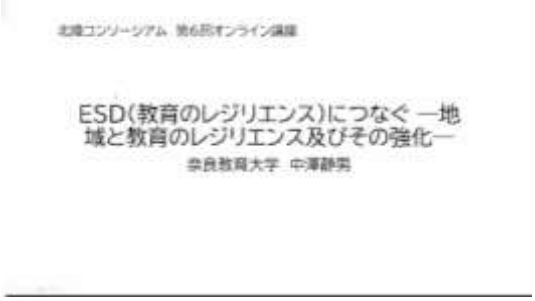
第 2 回　講師：奈良教育大学 ESD・SDGs センター　副センター長　及川　幸彦

第 3 回　講師：かがく教育研究所（神戸）地球科学、防災減災教育　髙本 格

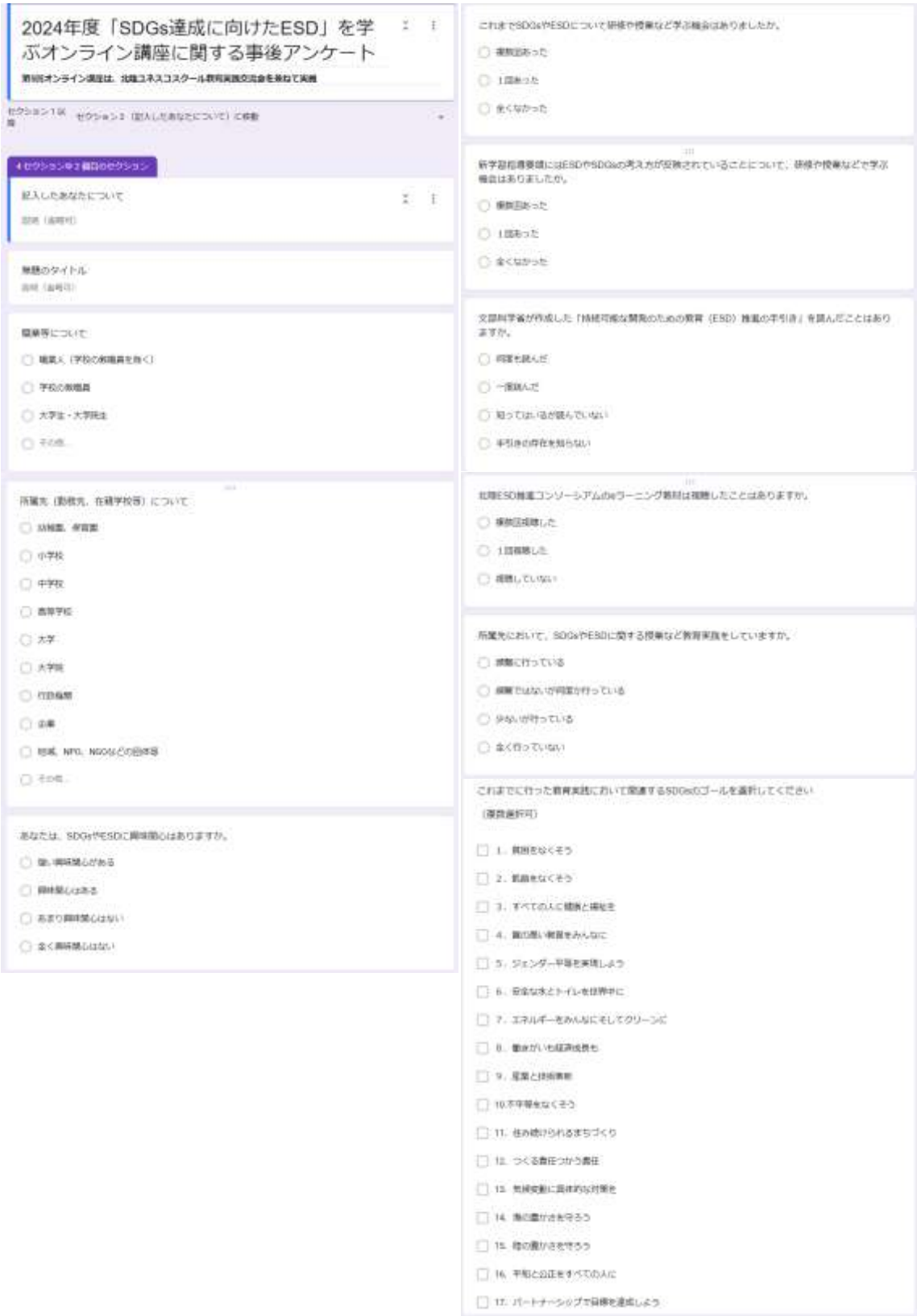
第４回　講師：三重大学　地域圏防災・減災研究センター長　川口 淳

第５回　講師：奈良教育大学 ESD・SDGs センター　副センター長　及川　幸彦

第６回　講師：奈良教育大学 ESD・SDGs センター　センター長　中澤　静男



■ 2024 年度「SDGs 達成に向けた ESD」を学ぶオンライン講座に関するアンケート（Google フォームにて実施）



2024年度「SDGs達成に向けたESD」を学ぶオンライン講座に関する事後アンケート

記入したあなたについて

無題のタイトル

職業等について

所属先（勤務先、在籍学校等）について

あなたは、SDGsやESDに興味関心はありますか。

これまでSDGsやESDについて研修や授業など学ぶ機会はありましたか。

新学習指導要領にはESDやSDGsの考え方が反映されていることについて、研修や授業などで学ぶ機会はありましたか。

文部科学省が作成した「持続可能な開発のための教育（ESD）推進の手引き」を読んだことはありますか。

北陸ESD推進コンソーシアムのeラーニング教材は視聴したことはありますか。

所属先において、SDGsやESDに関する授業など教育実践をしていますか。

これまでに行った教育実践において関連するSDGsのゴールを選択してください

（複数選択可）

今年度のオンライン講座について

3月ユネスコスクール教育実践交流会に参加した方は第6回オンライン講座にも参加したことになります。

今年度受講した講座

- [ ] 第1回
- [ ] 第2回
- [ ] 第3回
- [ ] 第4回
- [ ] 第5回
- [ ] 第6回
- [ ] 全部の講座

受講したの講座の内容は良かったですか *

- ○ とても良かった
- ○ 良かった
- ○ 良くなかった
- ○ とても良くなかった
- ○ その他

今回の講座の時間について *

- ○ 適切な時間だった
- ○ 時間が長い。もう少し短い方がよい
- ○ 時間がとても長い。もっと短い方がよい
- ○ 時間が短い。もう少し長い方がよい
- ○ 時間がとても短い。もっと長い方がよい
- ○ その他

講座が講義と質疑応答・意見交換の2部構成としたのはいかがでしたか。

- ○ とてもよい
- ○ 講師の講義をより多く聴きたい
- ○ 質疑応答・意見交換の時間をより多くして欲しい
- ○ グループ討議などの工夫が欲しい
- ○ その他

オンライン講座の運営について

開催（曜時）

今後の開催時期や曜日、時間帯などで改善が必要と思われる点について記入ください。 *

最大回答

今年度のオンライン講座は、能登半島地震から学ぶことを軸に内容を構成しましたがいかがでしょうか。該当数するものすべてにチェックしてください。（複数選択可）

- [ ] 実被災や再開市の学校現場の観点を聞けたのは良かった。
- [ ] 東日本大震災や阪神淡路大震災、南海トラフ巨大地震などの研究者の講義が良かった
- [ ] 今後の防災・減災教育の手がかりがつかめた
- [ ] 実践活動（教育）と防災減災（教育）の関係が明確になった
- [ ] 地域のレジリエンス強化と教育のレジリエンスについて考えるきっかけとなった
- [ ] 自然災害と人為災害との関係について考えるきっかけになった
- [ ] 災害を地域の特性や地学的な特徴など科学的に考えることが必要だと感じた
- [ ] 特にない
- [ ] その他

その他、講座の内容や運営に関するご意見やご希望、感想がありましたらご記入してください。特に、学びたいSD・SDGsに関するテーマ、話題や講師についての具体的な要望についても記入してください。

最大回答

■ アンケート結果

職業等について

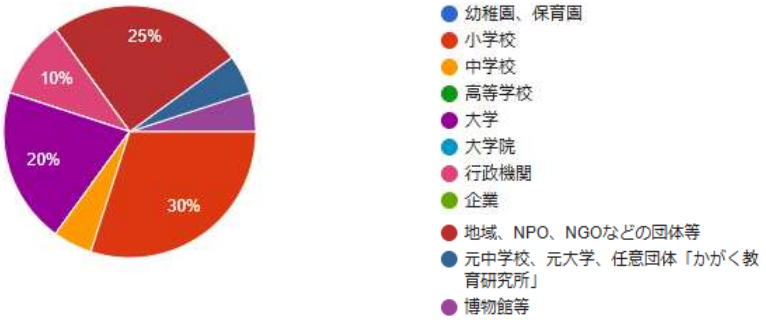
グラフをコピー

20 件の回答

所属先（勤務先、在籍学校等）について

グラフをコピー

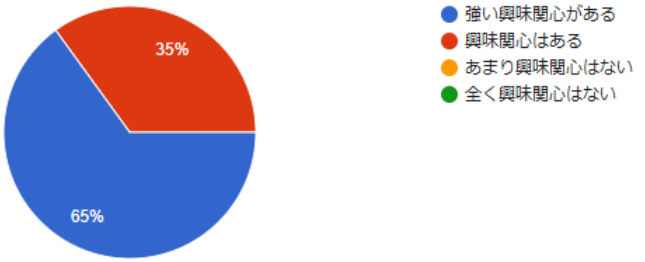
20 件の回答



あなたは、SDGsやESDに興味関心はありますか。

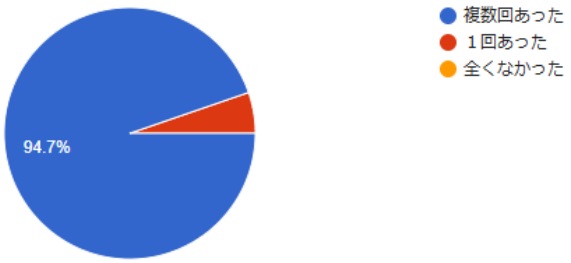
グラフをコピー

20 件の回答



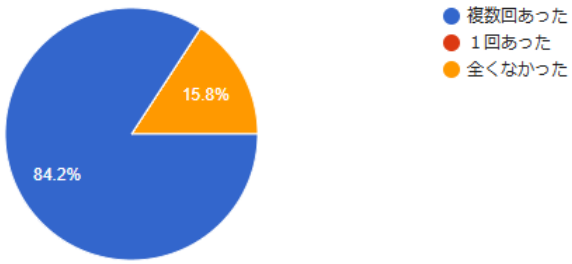
これまでSDGsやESDについて研修や授業など学ぶ機会はありましたか。 グラフをコピー

19 件の回答



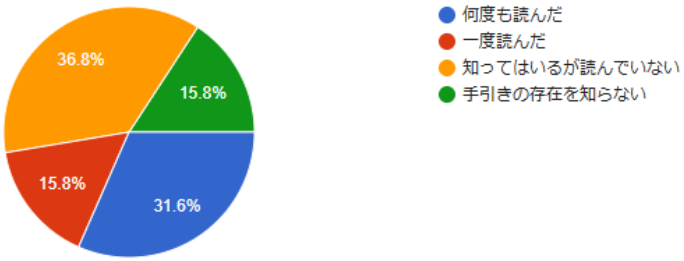
新学習指導要領にはESDやSDGsの考え方が反映されていることについて、研修や授業などで学ぶ機会はありましたか。 グラフをコピー

19 件の回答



文部科学省が作成した「持続可能な開発のための教育（ESD）推進の手引き」を読んだことはありますか。 グラフをコピー

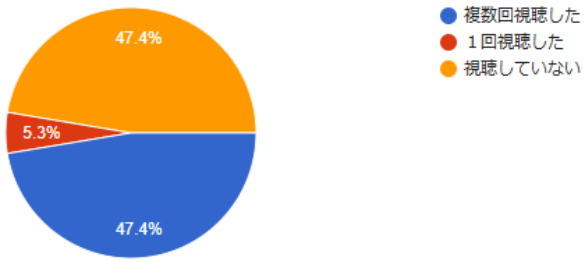
19 件の回答



北陸ESD推進コンソーシアムのeラーニング教材は視聴したことはありますか。

グラフをコピー

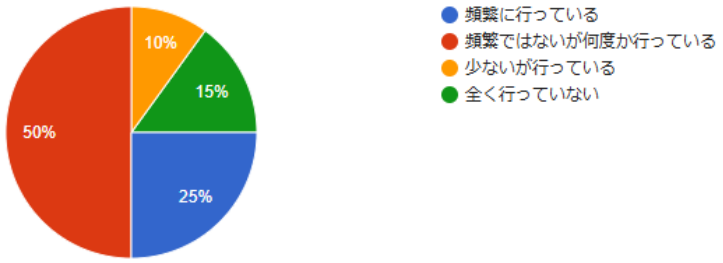
19 件の回答



所属先において、SDGsやESDに関する授業など教育実践をしていますか。

グラフをコピー

20 件の回答

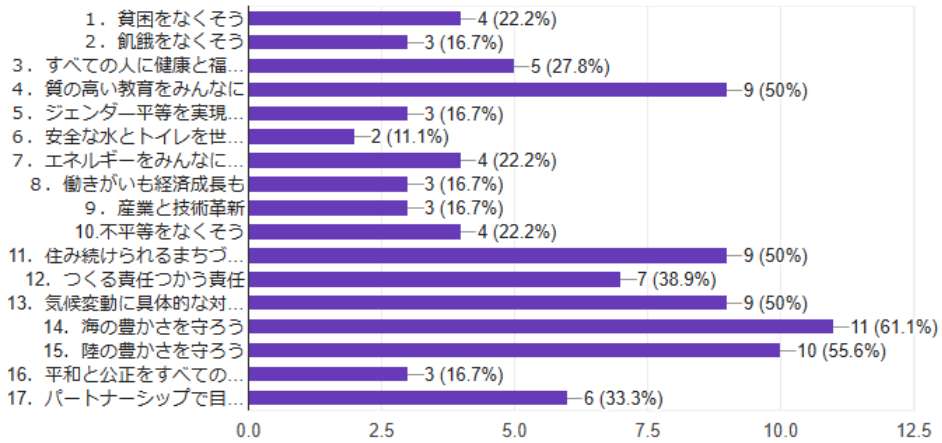


グラフをコピー

これまでに行った教育実践において関連するSDGsのゴールを選択してください

（複数選択可）

18 件の回答

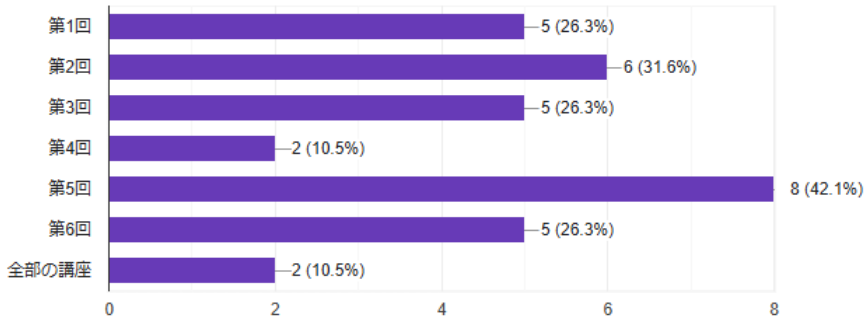


今年度のオンライン講座について

今年度受講した講座

グラフをコピー

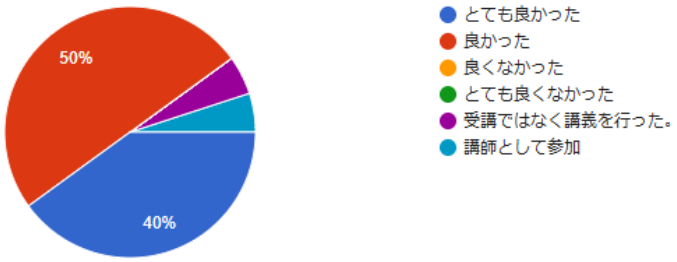
19 件の回答



受講したの講座の内容は良かったですか

グラフをコピー

20 件の回答



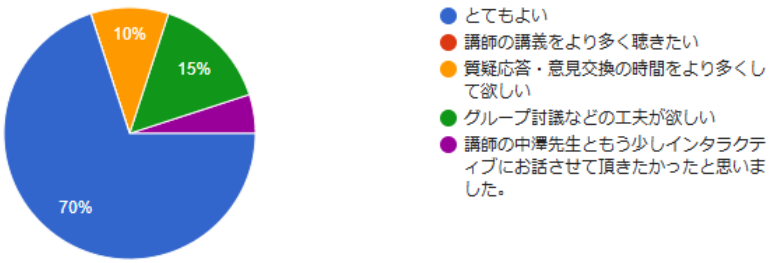
今回の講座の時間について

グラフをコピー

20 件の回答

講座が講義と質疑応答・意見交換の2部構成としたのはいかがでしたか。 グラフをコピー

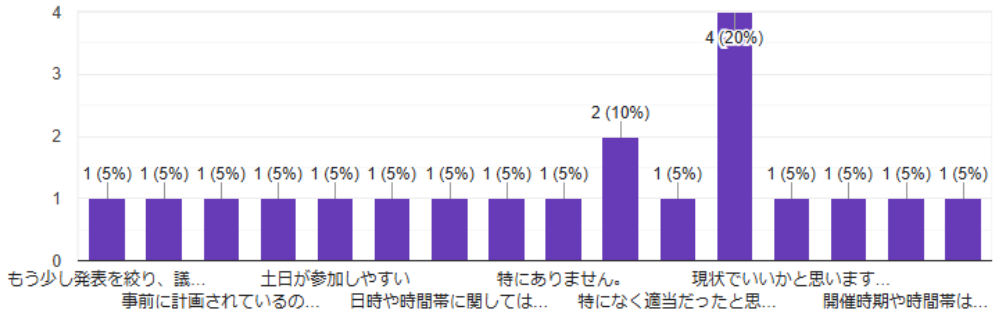
20 件の回答



オンライン講座の運営について

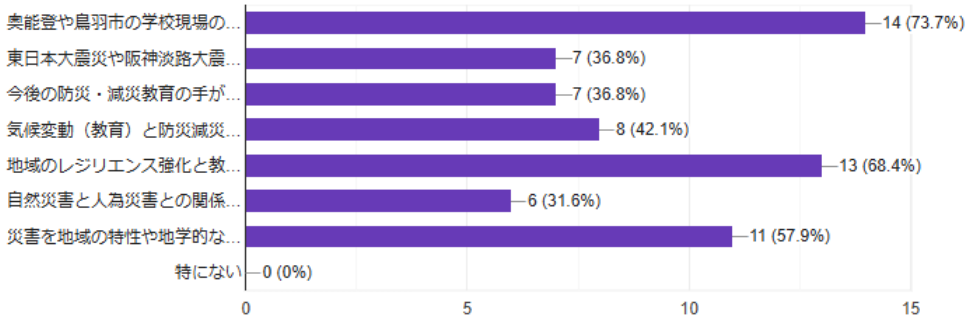
今後の開催時期や曜日、時間帯などで改善が必要と思われる点について記入ください。 グラフをコピー

20 件の回答

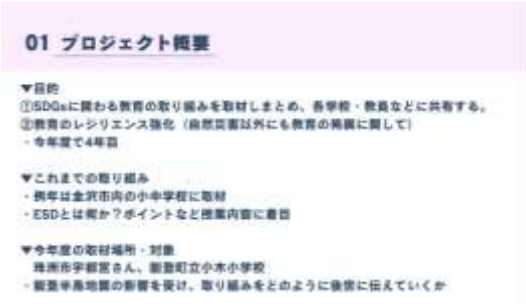


今年度のオンライン講座は、能登半島地震から学ぶことを軸に内容を構成しましたがいかがだったでしょうか。該当数するものすべてにチェックしてください。（複数選択可） グラフをコピー

19 件の回答



○　能登半島地震に学ぶ e ラーニング教材制作学生プロジェクト（大学生グループによる e ラーニング教材制作）に関する資料



■大学生グループによる感想

今回の活動を通して、主に生き物調査や、この海洋教育について深く知れたということもありました。それに加えて、動画編集や教師の方々の大変さも知ることができました。また、自分自身も地元の良さや、生き物の大切さを児童たちに伝えていきたいと思いました。

（金沢学院大学４年　田村　仁）

今回の活動を通して、若山小学校の児童も小木小学校の児童も「児童同士が話し合う」という場面がすごく多く見られたので、このような活動を通すことによってやはり地元への愛着というものが深まっている様子を感じました。今すぐ結果が出ることではありませんが、こうした活動を続けていくことによって、地元への愛着が繋がって、その何年後かには「ここに住みたい」という気持ちが強くなっていたらな、と思うので、この活動を自分も教員になって続けていきたいと思いました。

（金沢学院大学４年　荒島　蓮）

今回のプロジェクトを通して私が最も感じたのは、「地域と連携した教育の重要性」です。宇都宮さんに取材をさせていただいた際に、珠洲には希少な生き物がいるにも関わらず、地域の認識と専門家の方の認識のギャップがあるということを知りました。「地域と連携した教育」が専門家、地域、そして子供たちの想い、先生方の思いを繋げていくということに気づきました。私自身も大学で教職を取っているので、実践する場所がある可能性があります。そのため、今回の学びを生かしていきたいと思いました。

（金沢大学２年　山梨　英里奈）

私は小木小学校の海洋教育を見させていただき、こうした教育がどんどんこれから様々な地域に広がっていけたらいいなと思いました。この教育を通して子供たちが地域に愛着を持ったり、持続可能的な社会を目指すための第一歩に繋がっていったりと思います。このような教育をどんどん続けていけたらいいなと思いました。

（金沢学院大学３年　杉村　明日香）

改めて、今回の取材にご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。今回のプロジェクトの意義は、教職課程を履修している学生グループが取り組んだ点にあります。今年で４年目となる ESD プロジェクトですが、全員が教職課程を履修しているメンバーで構成されたのは今回が初めてです。そのうち 2 人は現在 4 年生で、4 月からは実際に小学校の教員になります。

動画のクオリティという点では、テレビ局やプロの制作チームには及ばないかもしれません。しかし、このプロジェクトを通じて、4 月から教員になるメンバーが取材を行い、学校教育の多様な在り方を学ぶ機会を得られたことに大きな意義があると考えています。この経験が、今後、石川県や北陸地域の学校教育の質やレベル向上にもつながるのではないかと思います。

動画編集が思うように進まず、夜遅くまでの作業や、休日に緊急で集まることもあり、大変な場面もありました。しかし、最後まで皆で力を合わせ、無事にプロジェクトをやり遂げることができて良かったです。

（金沢大学４年　小倉　凌）